

長野県埋蔵文化財センター年報23

2006

財団法人長野県文化振興財団
長野県埋蔵文化財センター



西近津遺跡群（佐久市）の弥生後期集落と現代の都市



東條遺跡（千曲市）と一本松街道

目 次

口絵写真

西近津遺跡群の弥生後期集落と現代の都市
東條遺跡と一本松街道

目 次

2006年度の埋蔵文化財センター……………	1	(2) 駒形遺跡	
I 発掘作業の概要		(3) 構井・阿弥陀堂遺跡	
北信		(4) 箕輪遺跡	
(1) 柳沢遺跡 ……………	3	(5) 石子原遺跡ほか	
(2) 川久保遺跡 ……………	4	(6) 川路大明神原遺跡ほか	
(3) 千田遺跡 ……………	6	III 普及公開活動の概要……………	30
(4) 宮沖遺跡 ……………	8	(1) 展示会講演会	
(5) 立ヶ花城跡 ……………	8	(2) 現地説明会	
(6) 南曾峯遺跡 ……………	9	(3) ニュース～みすずかる～	
(7) 表町遺跡 ……………	10	IV 研修、資料調査等の概要……………	32
(8) 東條遺跡 ……………	12	(1) 講師招へいなどによる指導	
(9) 峯謡坂遺跡 ……………	13	(2) 全埋協などへの参加	
(10) 力石条里遺跡群 上五明条里水田址…………	14	(3) 県外研修	
東信		(4) 考古学関係研究・研修・ 講演会での発表	
(11) 和田原遺跡 ……………	15	(5) 県内市町村及び関係機関 への協力・指導	
(12) 西近津遺跡群 ……………	16	(6) 学校への協力・指導	
(13) 周防畑遺跡群 ……………	18	(7) 資料提供・貸出し、転載許可	
(14) 濁り遺跡 久保田遺跡…………	20	V 組織と事業の概要……………	36
(15) 西一里塚遺跡 ……………	21	(1) 組織	
(16) 森平遺跡 ……………	22	(2) 職員	
(17) 今井宮ノ前遺跡 ……………	23	(3) 事業	
南信			
(18) 御社宮司遺跡 ……………	24		
(19) 東高遠若宮武家屋敷跡 ……………	25		
(20) 竹佐中原遺跡 井戸端遺跡…………	26		
II 整理作業の概要……………	27		
(1) 天神城跡			



- 1 和田原遺跡
- 2 西近津遺跡群
- 3 周防畑遺跡群
- 4 濁り遺跡
- 5 久保田遺跡
- 6 西一里塚遺跡
- 7 森平遺跡
- 8 今井宮ノ前遺跡



2006年度の長野県埋蔵文化財センター

2006年度長野県埋蔵文化財センターでは、14の開発事業にかかわる発掘調査及び報告書刊行に向けた整理作業をおこなった。発掘調査を実施した遺跡は、25遺跡、報告書は4冊刊行した。本年度も遺跡所在地域、長野県や日本歴史の解明に結びつく数多くの考古資料がみいだされた。

■ 旧石器時代

長野市南曾峯遺跡では、砂礫層をはさんで2枚の文化層が確認され、あわせて約2,000点の旧石器が出土した。過去に中期旧石器時代の可能性があると指摘された石器群については、今回調査した石器群と同一層位に含まれていた蓋然性が高いと考えられた。飯田市竹佐中原遺跡は、未調査部分の調査を実施した。旧石器は発見されなかったが、未調査部分の一部(約340㎡)は今後の研究材料に資するため現状で保存されることになった。

■ 縄文時代

中野市千田遺跡で中期前葉の住居跡が、1軒発見され土偶が6点出土したが、ほかの遺跡からは、土器片などが発見された程度で、縄文時代遺構・遺物の検出は少なかった。茅野市駒形遺跡は本格整理作業をおこない、報告書を刊行した。多量に出土した黒曜石のうち8,000点余の原産地同定分析が完了し、約75%が諏訪星ヶ台産であることが判明した。また、黒曜石石器資料の分析から石鏃製作技術についての知見が得られている。

■ 弥生時代

佐久市内の中部横断自動車道建設用地内の遺跡から数多くの資料を発見した。森平遺跡では、環濠に囲まれた中期後半期のみ存続した集落の広がりや昨年度に続いて調査した。西一里塚遺跡では、集落域の西側を流れていた河川跡内から後期の遺物が出土し、集落端のありようの一端が明らかにできる資料を得た。また、佐久地方ではこれまで確認されていない木製農具も出土した。周防畑遺跡では、微高地部分から後期の居住域と墓域が形成されていた状況を検出した。さらに、銅 鋤

が装着された墓坑や管玉、ガラス玉が副葬された土器棺も発見された。西近津遺跡では、後期の住居跡が密集する集落を発見した。なかでも低地を一望できる場所からは超大型住居跡2軒が発見され、1軒は国内最大級である。2軒が同時存在したか、集落の中でどのような性格を持つ建物かなど、今後東日本の弥生後期社会を考える上で欠くことのできない資料である。中野市柳沢遺跡では、高社山末端の夜間瀬川縁から水田跡を発見した。詳細は次年度調査でさらに明らかにできると考えている。

■ 古墳・奈良・平安時代

中野市千田遺跡、川久保遺跡からは、この地域での発見例が少なかった古墳時代後期の集落を斑尾川沿いに検出した。カマド付近に生活痕跡をそのまま残した住居跡もあり、集落の廃絶にかかわる知見が得られる可能性もある。佐久市西一里塚遺跡、周防畑遺跡では、古墳時代後期から平安時代にかけての大集落の一角を検出した。両遺跡は間の小規模な田切で区画されているが、ともに稠密に重複する竪穴住居跡や掘立柱建物跡がある。隆盛であった様子が伺える。この背景には、佐久郡衙の存在が想定でき、詳細は今後の課題である。

■ 中・近世

千曲市東條遺跡の中世前半の建物跡や井戸跡などの遺構や遺物をはじめ、飯綱町表町遺跡の中世後半の建物跡や井戸跡、茅野市御社宮司遺跡の近世の水田跡、伊那市東高遠武家屋敷遺跡の高遠藩家臣の屋敷跡など、中・近世の居住域や生産域を調査した。なかでも、東條遺跡から出土した呪符木簡の「蘇民将来符」は、県内初でしかも最古で、蘇民将来信仰を考える重要資料となる。絵図面通りに礎石が検出された東高遠武家屋敷も本建物以前の建物の存在が確認され、文献だけでは明らかにできない側面を考古資料で確かめ得ることを再認識した。

(調査部長 市澤英利)

I 発掘作業の概要

遺跡名	所在地	事業名	面積㎡	調査期間	時代・内容	主な遺物
柳沢	中野市	千曲川柳沢築堤	2,000	10.10~12.15	弥生:水田跡、溝跡 中世?:掘立柱建物跡 近世:水田跡	弥生:土器(壺、甕、鉢)、管玉 近世:陶磁器(碗)、下駄
川久保	中野市	千曲川替佐築堤	1,000	9.15~10.18	古墳後期:竪穴住居跡、掘立柱建物跡 中世:竪穴建物跡、掘立柱建物跡	古墳:土師(甕)、須恵(大甕、蓋、坏)、土錘 中世:青磁碗、砥石
千田	中野市	千曲川替佐築堤	5,600	4.24~10.18	縄文中期:竪穴住居跡、集石 弥生後期:竪穴住居跡 古墳後期:竪穴住居跡、掘立柱建物跡 中世:掘立柱建物跡、溝跡、焼土跡、水田畑跡	縄文:土器(深鉢)、土偶、磨石 古墳:土師(甕、坏、甕)、須恵(高坏)、垂飾、白玉、刀子
宮沖	中野市	千曲川替佐築堤	(420)	10.23~12.14	古墳:竪穴住居跡 平安:竪穴住居跡 中世・近世:柱跡、水田・畑跡	弥生:土器(甕) 古墳:土師(甕、坏)、石錘、砥石 中世:内耳鍋
立ヶ花城跡	中野市	北陸新幹線	3,000	7.10~7.31	検出遺構なし	不明:鏝(かすがい)
南曾峯	長野市	北陸新幹線	100	5.8~7.31	旧石器:遺物集中	旧石器:ナイフ形石器、搔器、抉入削器
表町	飯綱町	(主)長野荒瀬原線	5,200	4.26~11.30	縄文:落とし穴 平安:竪穴住居跡 戦国:掘立柱建物跡、竪穴状遺構、溝跡、井戸跡	縄文:石鏝、打製石斧 平安:土師(甕、坏)、須恵(坏) 戦国:内耳鍋、カワラケ、甕、石臼、石鉢
東條	千曲市	一般国道18号 坂城更埴バイパス	3,500	4.24~12.18	古墳:奈良:竪穴住居跡、掘立柱建物跡 鎌倉・室町:掘立柱建物跡、礎石建物跡、井戸跡、溝跡、木棺墓、焼土跡、配石、竪穴状遺構	古墳:奈良:土師(甕、高坏)、須恵(坏、甕、はそう)、銀環 鎌倉・室町:陶磁器(碗、水注、水滴、瓶子)、銅鏝、古銭、木簡、曲物、櫛、下駄、漆器、箸、人骨、獣骨、種実
峯謡坂	千曲市	一般国道18号 坂城更埴バイパス	850	10.1~10.31	検出遺構なし	平安:須恵(坏)
力石条里	千曲市	(主)長野上田線 力石バイパス	6,100	4.17~12.15	弥生後期:竪穴住居跡、溝跡 奈良・平安:溝跡 中世:水田跡	弥生:土器、石器 奈良・平安:土器 中世:陶磁器、金属器
上五明条里 水田址	千曲市	(主)長野上田線 力石バイパス	950	10.26~12.15	奈良・平安:水田跡、溝跡、馬墓、竪穴住居跡	平安:土師器、石器、馬歯 中世:陶磁器
和田原	小諸市	中部横断自動車道	1,935	8.21~9.21	奈良:竪穴住居跡 不明:溝跡	奈良:土師(甕)、須恵(坏、蓋)、台石、鉄くぎ
西近津	佐久市	中部横断自動車道	4,000	6.22~12.22	弥生後期:竪穴住居跡、溝跡 古墳後期:竪穴住居跡、溝跡 奈良:竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡 平安:竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡 中世:掘立柱建物跡、溝跡	縄文:土器(深鉢)、土偶、石鏝 弥生:土器(高坏、壺など)人面付土器片、二股勾玉、紡錘車、銅鋼、銅鏝、鉄鏝、磨製石斧、管玉、ガラス玉 奈良・平安:土師・須恵器(甕、坏)、砥石、鉄鏝、刀子 中世:陶器(碗、カワラケ)
周防畑	佐久市	中部横断自動車道	38,800	4.24~12.19	弥生:竪穴住居跡、掘立柱建物跡、円形周溝墓、土器棺墓、土坑墓、溝跡 平安:鎌倉・室町:水田跡、溝跡	弥生:土器(甕、壺、高坏)、匙形土製品、打製石斧、ガラス小玉、管玉、勾玉 古墳:土師(甕)、平安:土師(甕、坏)
濁り	佐久市	中部横断自動車道	7,400	9.20~11.14	平安:掘立柱建物跡、溝跡	弥生:石鏝 平安:土師(坏)、曲物、下駄、銭貨
久保田	佐久市	中部横断自動車道	6,150	9.20~11.14	検出遺構なし	弥生~中世:土器片
西一里塚	佐久市	中部横断自動車道	8,400	4.18~9.11	平安:鎌倉・室町・江戸:水田跡 弥生:掘立柱建物跡、溝跡、河川跡	弥生:土器(高坏、甕)、石鏝、鉄先、柄、たたき石 鎌倉・室町:銭貨
森平	佐久市	中部横断自動車道	2,500	4.18~6.21	弥生中期:竪穴住居跡、掘立柱建物跡、配石遺構、周濠	弥生:土器(壺、甕、鉢、碗)、太型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、磨製石鏝、砥石
今井宮ノ前	佐久市	中部横断自動車道	5,000	4.25~6.22	江戸:井戸跡、土坑墓	縄文:打製石斧 弥生:土器(高坏) 江戸:碗、カワラケ、臼、茶臼
御社宮司	茅野市	一般国道20号 坂室バイパス	5,000	4.21~9.25	鎌倉・室町:掘立柱建物跡、竪穴建物跡、土坑墓、焼土跡、遺物集中、溝跡 江戸:水田跡、竪穴状遺構	縄文晩期:土器(鉢)、石鏝、くぼみ石 鎌倉・室町・戦国・江戸:カワラケ、内耳鍋、鉄くぎ、銭貨、煙管、土錘
構井・阿弥 陀堂	茅野市	県道大年線	300	1.15~1.26	縄文:竪穴住居跡 弥生:方形周溝墓 古墳:円墳(周溝のみ)	縄文:土器(深鉢)、刃器 弥生:土器(甕、壺)
箕輪	南箕輪 村	一般国道153号 伊那バイパス	2,000	6.12~6.23	中世・近世:水田跡、溝跡	中世~近世:陶磁器
東高遠若宮 武家屋敷跡	伊那市	一般国道152号 高遠バイパス	1,060	8.7~11.9	江戸・明治:屋敷跡	江戸・明治:陶磁器(碗、皿、徳利、大甕) 銭貨、刀装具、火箸、下駄、おはじき
竹佐中原	飯田市	一般国道474号 飯喬道路	2,740	9.4~11.14	検出遺構なし	縄文:打製石斧
井戸端	飯田市	一般国道474号 飯喬道路	(1,156)	11.13~12.11	江戸:建物跡 不明:土坑	縄文:土器片 鎌倉・室町:内耳鍋 江戸:陶磁器(碗)

() 内試掘面積

(1) 柳沢遺跡群 (千曲川柳沢築堤関連)

所在地および交通案内：中野市柳沢字屋敷添

国道292号線古牧橋の南交差点東約600m

遺跡の立地環境：高社山山麓の崖錐地形先端部および夜間瀬川沿いの低地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
18.10.10～ 12.15	2,000㎡	綿田弘実 市川隆之 入沢昌基

検出遺構

種類	数	時期
水田	2	弥生、近世
掘立柱建物跡	3	中世?
溝跡	10	弥生、近世

出土遺物

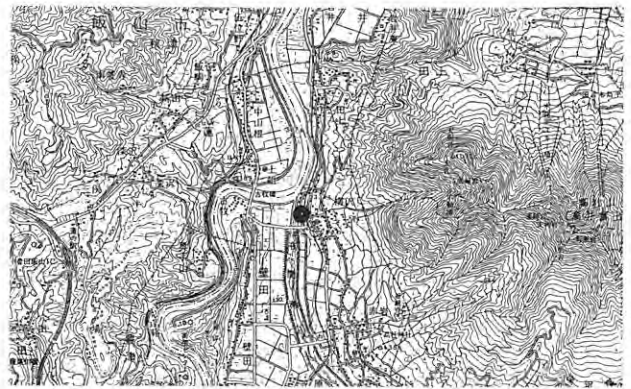
種類	時期・内容
土器・陶磁器	弥生中・後期(壺、甕、鉢)、江戸(碗)
木製品	弥生(加工木)、江戸(下駄)
石製品	弥生(管玉)

夜間瀬川べりの低地で発見された

弥生時代の水田跡

柳沢遺跡は千曲川をのぞむ高社山西麓に立地する広大な遺跡であるが、発掘調査歴もなく詳細は不明であった。今回、千曲川と夜間瀬川合流地点付近に築堤工事が計画されたことから、平成17年度に中野市教育委員会が試掘調査を実施し、水田跡や弥生土器などが確認された。本調査は長野県埋蔵文化財センターが実施することとなり、本年度は千曲川と夜間瀬川合流地点付近の築堤予定地南端部分を対象とした。

遺跡の土層は下部の礫層、その上の粘土や泥炭を基調とする複数の土層、上部の砂層やシルトを基調とする土層から構成される。遺構は上部で洪水シルトで埋積された近世水田跡(第1面)、調査地北部の微高地付近で掘立柱建物跡3棟(第2面)、下部の粘土層中で弥生時代水田跡(第3面)を検出した。弥生時代前後に水田に利用されていたが、一部はある時期集落となり、近世には再び全域が水田に利用される変遷がとらえられ



た。

弥生時代の水田跡 調査地は扇状地扇端部が低地に接する付近にあたり、調査地東側は微高地、西側は低地となる。この地形変換点にそって幅2m前後の溝跡、この溝跡西側低地部分で畦跡と枝溝跡が検出された。水田面は溝跡周辺のみ部分的な砂層に覆われ、畦も一部は明瞭で木芯畦跡も確認できたものの、大部分は上層の水田耕作が重なって遺存状態は悪い。遺物は南部で弥生時代中期後半の土器が多く出土し、砂層の被覆が薄い北部では弥生時代後期の土器片が出土した。このことから、同じ調査面として調査したが、一部は弥生時代後期と中期後半の遺構を同時に検出した可能性がある。なお、地形変換点に設けられた溝跡内から管玉が1点出土している。

今回の調査では中野市周辺ではあまりみつかっていなかった水田跡が発見され、新たな知見を加えることができた。



図1 弥生時代の水田面全景

(2) 川久保遺跡 (千曲川替佐築堤関連)

所在地および交通案内：中野市豊津字堰添

上信越自動車道信州中野 IC より北へ 4 km

JR 飯山線替佐駅より東へ 0.6 km

遺跡の立地環境：斑尾川と千曲川の合流地点の左岸

発掘期間等

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
18.9.15～ 10.18	1,000㎡	綿田弘実 市川隆之 入沢昌基

検出遺構

種類	数	時期
竪穴住居跡	4	古墳後期～奈良
掘立柱建物跡	5以上	古墳後期1、中世4以上
溝跡	1	中世
水田・畑跡	2	中世水田1、中世畑跡1
土坑	約500	古墳後期、中世

出土遺物

種類	内容
土器	古墳後期（土師甕、須恵大甕・坏・蓋）、中世（青磁碗）
石器	中世（砥石）
土製品	古墳後期（土錘）

千曲川川べりの古墳時代の集落

平成16年から始まった川久保遺跡の調査は、本年度おこなった5区南側（図6参照）の調査をもって終了した。微高地にあたる5区では昨年度の調査により古墳時代後期の集落、中世前期の竪穴建物、掘立柱建物が存在していたことが明らかとなった。本年度はそのつづきとなる。

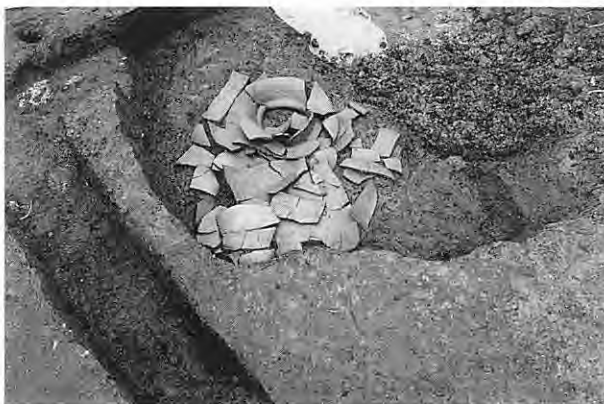
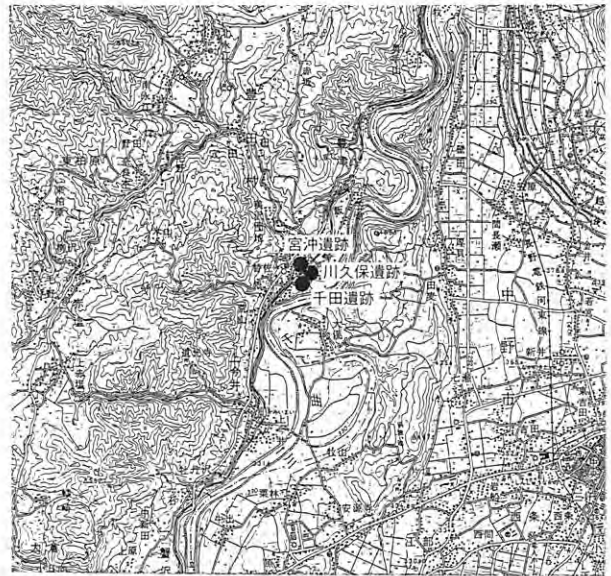


図2 住居跡から出土した大甕



調査の結果、5区南側では古墳時代後期では4軒の竪穴住居跡と掘立柱建物跡1棟を検出することができた。いずれも基盤の礫を避けるように建物があった様子うかがえる。

竪穴住居跡のなかで特徴的なものをあげてみると、土錘が出土した住居跡があり、漁労がおこなわれていたことを示唆している。千曲川、斑尾川べりにおける古墳時代後期の生業の一端うかがえよう。また須恵器の大甕をもつ住居跡も発見され、この時期の遺構としてはまれな事例を得ることとなった。ただ残念なことに住居跡の大部分は調査区外にかかり、ほかの遺物もわずかであったため現時点でその性格を明らかにすることは難しい。

本年度調査された千田遺跡12区（図6参照）はちょうど斑尾川をはさんで本遺跡の対岸に位置し、発見された住居跡の時期もほぼ同じと考えら



図3 古墳時代後期の掘立柱建物跡



図4 中世の掘立柱建物跡の柱穴群

れる。今後比較検討することによって集落の性格や変遷を明らかにすることができるであろう。

中世の集落と水田・畑跡

昨年度、本遺跡の調査から平安時代末期から鎌倉時代初頭以降、斑尾川沿いの低地では安定的な水田が営まれ、それに対し1区(図6参照)と5区の微高地では、掘立柱建物や堅穴建物が存在していたことが明らかとなった。

本年度、5区南側の調査でも約500基におよぶ土坑が検出され、そのなかで掘立柱建物跡も数棟発見されている。出土した遺物から13世紀の集落跡であることがうかがえる。

やがて集落のあった同じ場所に水田と畑が広がり、生産域へと変化する。水田区画と畑の畝はともに等高線にそって長くとられ、用水によって区分されている。おそらく斑尾川上流より取水し灌漑したものと同様に推測される。集落の展開と土地利用の変遷を追うことは今後の整理作業の課題である。

これまでの調査でわかったこと

川久保遺跡の調査は平成16年に始まって本年度終了した。その調査面積も膨大ながら、千曲川べりに立地して、数多くの洪水堆積層が積み重なっており、過去の洪水に関するさまざまな資料を得ることができた。斑尾川対岸の千田遺跡とは十分な対比検討はできていないが、現時点でとらえられた遺跡の概要を簡単に紹介しておく。

川久保遺跡では縄文時代晩期以前に斑尾川が流れていたと思われるが、それ以後は現位置近くに移動したようだ。そのかわり、弥生時代～平安時

代には千曲川洪水の水流に押された斑尾川が削っていったと思われる短い窪地が何本も重なるが、中世以後はこの窪地もみられなくなり、ひたすら洪水土の堆積で窪地が埋められて平坦な地形に変わっている。時代が下るに従って、洪水の浸食作用を受けなくなる傾向があり、そのなかで洪水が頻発する時期と少ない時期が繰り返している様子がみられる。

発見した遺構は縄文時代晩期ころと思われる焼土跡、弥生時代中期後半の土器集中、弥生時代後期の住居跡、古墳時代前期の水田跡と土器集中、古墳時代後期～奈良時代の集落跡と水田跡、平安時代の集落跡、中世以後では集落跡と何枚も重なる水田跡がある。

遺跡地は水田に利用されることが多かったが、一時的に集落がつくられた時期もある。弥生時代後期は住居跡1軒のみでよくわからないが、古墳時代後期前後、平安時代後期～中世前期には集落が営まれている。ちょうどその時期は洪水土の堆積があまり認められず、腐植土層が形成されているので、比較的洪水が少ない時代だったらしい。

このように、川久保遺跡では平安時代まで千曲川、斑尾川による地形の変化や洪水などの環境変化のなかでさまざまな活動が断続的に営まれているが、中世以後は安定した地形環境のなかで継続的に人が住むようになり、水田も広範囲に広がる。地形環境の安定に加えて、用水を掘削するなど地形環境の克服の努力が進められた結果と思われる。



図5 第1面で調査した水田・用水・畑跡

(3) 千田遺跡 (千曲川替佐築堤関連)

所在地および交通案内：中野市豊津字千田

上信越自動車道信州中野 IC より北へ4 km

JR 飯山線替佐駅より南東へ直線距離0.1km

遺跡の立地環境：蛇行する斑尾川右岸の段丘上

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
18.4.24～ 10.18	5,600㎡	綿田弘実 市川隆之 入沢昌樹

検出遺構

種類	数	時期
竪穴住居跡	19	縄文中期1、弥生後期2、古墳後期16
掘立柱建物跡		古墳後期、中世
溝	10	中世
集石	1	縄文中期
土坑	950	縄文～中世
焼土跡	10	中世
水田・畑跡	5	中・近世
自然流路		中・近世

出土遺物

種別	時期・内容
土器・陶磁器	縄文(深鉢)、古墳後期(土師甕・坏・甌、須恵高坏)
石器	縄文(磨石)
土製品	縄文(土偶)
石製品	古墳(垂飾、白玉)
鉄器	古墳(刀子?)

斑尾川右岸に広がる古墳時代集落(12区)

千田遺跡は千曲川左岸、標高約330m前後の地点にあり、JR飯山線替佐駅付近から千曲川までの緩斜面に広く展開する。本年度は平成14・15・17年度につづく4年目の調査となり、昨年度トレンチ調査した斑尾川右岸の10・12区を面的に発掘した。

飯山線に接する12区の西側2,600㎡では古墳時代後期を中心に縄文・弥生時代から中世におよぶ集落跡を検出した。一方、東側は斑尾川に浸食され、中世以前の土地は残っていない。斑尾川河口付近に位置する10区3,000㎡では、重層する中・近世の水田・畑跡と集落跡の一部を調査した。

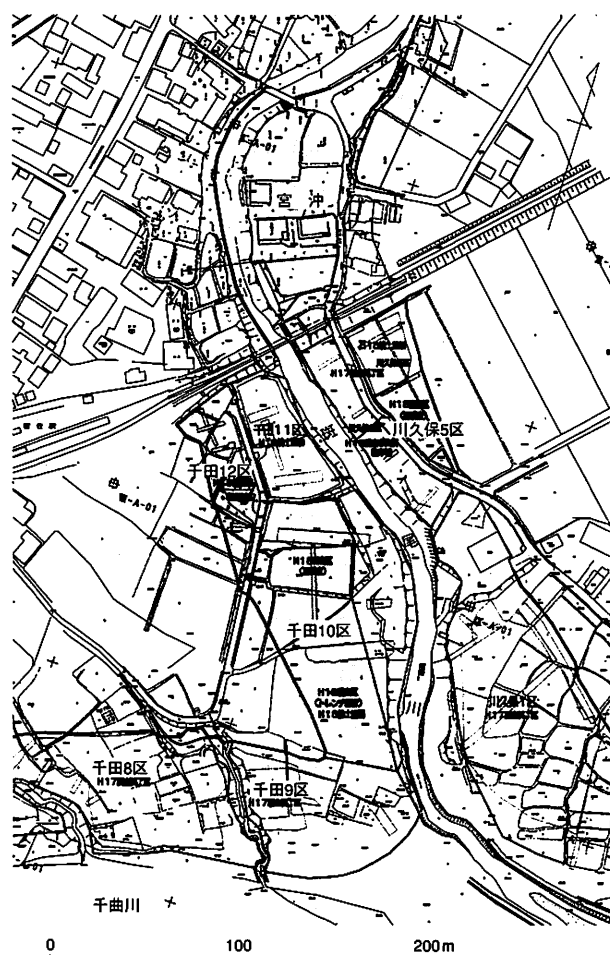


図6 替佐築堤関連遺跡調査区分図 (S=1:4,000)

以下に10区と12区にわけ、時期を追って調査の概要を記す。

縄文・弥生時代 縄文時代の調査面では、住居跡1軒と性格不明のピット約100基を検出した。住居は半分ほど用地外にかかるが、直径約5.6mの円形竪穴で、中期前葉の深鉢を炉体土器とする炉を備える。調査区全体が散漫な遺物包含層となり、中期土器の小破片と磨石数点が出土したにとどまるものの、土偶が6点みられる。中期集落跡がある8区北端から住居跡まで約80m離れ、ムラはずれにあたる可能性がある。古墳面直下では縄文時代終末期ころの土坑数基が検出された。

弥生時代の遺構は古墳時代と同じ調査面で検出され、後期の住居跡2軒がある。いずれも用地外にかかり古墳時代住居に切られて全体形は明らかではない。

古墳時代 16軒の住居跡はすべて6世紀後半から7世紀初頭に属す。調査区の南北に分かれて分布



図7 12区古墳時代カマド遺物出土状態

し、中央部には掘立柱建物跡がみられる。古墳時代の遺構は調査区北西側の用地外、飯山線と水田下にも広がり、南端までは達していない。

堅穴住居跡の規模は4m級が半数を占め、8m級までである。大部分が北西壁にカマドを備え、土器や礫を芯材に用いるもの、地山削り出しで袖をつくるものがみられる。遺物量の多い住居跡では覆土中にほとんど遺物が含まれず、カマド付近の床面に完形土器が残される特徴的な出土状態がうかがえた。土器は大部分が土師器で、須恵器は数個体が含まれるにすぎない。

長野盆地以北では古墳時代集落跡の調査例は少なく、貴重な調査事例になるものと考えられる。**中世** 調査区の北半部分に集中してピット群約400基が検出された。掘立柱建物跡5棟以上と井戸跡1基を含む。建物の軸方向は座標北からわずかに西に振れるもようである。希少な陶磁器から12・13世紀ころの集落跡と推定される。

重層する中・近世の水田・畑跡 (10区)

10区は12区南東に隣接した斑尾川沿いの調査区である。ここは斑尾川の旧流路が重なる低地で、洪水土で埋まった水田跡や畑跡が良好に残されていた。調査は地表面から順に江戸時代水田跡(1面)、戦国時代の畑と屋敷跡(2面)、それ以前の水田面(3～5面)の計5面を調査した。

最下層の5面は旧斑尾川と思われる河道跡が調査区を横断し、その岸にそって棚田状の小水田跡がみつかった。洪水以後に河道跡は砂礫で埋まって南東側に移動し、水田域も広がっている。この

段階にあたるのが3・4面の水田跡である。3・4面とも地形にあわせて等高線方向に長い畦を配置しているが、4面の水田跡のほうが微地形にあわせたより不定形な区画となっている。

3面は洪水による小礫を含む砂層で埋められ、斑尾川はさらに東側の現位置に近い場所に動いている。この移動後の調査面が2面にあたる。2面は斑尾川沿いに畑跡、西寄りの高台で掘立柱建物跡数棟からなる屋敷跡を検出したが、12区の中世集落跡とは時期が異なる。2面以後は厚い洪水土の堆積が減少してくるが、そのなかで比較的厚い洪水砂層が1枚認められ、その洪水砂で被覆された水田跡と畑跡を1面として調査した。

各調査面の時期は、出土遺物から2面が16世紀ころ、1面は17世紀ころと捉えられる。3～5面は遺物が少ないため詳細は不明だが、3面は堆積土層の連続性から2面に近い時期と思われ、中世後半ころの可能性がある。

以上のように、10区は斑尾川流路が重なる低地だったが、流路の移動とともに生産域に利用されるようになったと思われる。ただし、水田のみが継続的に営まれるのではなく、戦国時代には居住域と畑、近世には水田跡と畑に利用されている。対岸の川久保遺跡と類似した変遷ながら、若干様相が異なるところもある。



図8 10区第5面水田跡(線は河道跡)

(4) 宮沖遺跡 (千曲川替佐築堤関連)

所在地および交通案内：中野市豊津字宮沖
 上信越自動車道信州中野 IC より北へ 4 km
 JR 飯山線替佐駅より北東へ直線距離 0.2 km
 遺跡の立地環境：蛇行する斑尾川左岸の段丘上
 発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
18.10.23～ 12.14	420㎡	綿田弘実 市川隆之 入沢昌樹

検出遺構

種類	数	時期
竪穴住居跡	11	古墳 6、平安 1、不明 4
ピット、土坑	33	古墳 1、中世 32
水田・畑跡		中・近世
流路跡	1	古墳以降

出土遺物

種別	時期・内容
土器類	弥生(甕)、古墳(土師甕・坏)、平安(土師坏) 中世(内耳鍋)
石製品	時期不明(石錘、砥石)
鉄器	器種不明

宮沖遺跡は替佐遺跡群の一角を占める。斑尾川の左岸、標高約331m前後の地点にあり、JR飯山線で川久保遺跡と画される。次年度調査予定地約7,000㎡を対象にトレンチ掘削で試掘し、上表の結果を得た。市道以東の段丘上は古墳・平安時代と中世の遺構面2面を確認し、下層は古墳時代後期を主体に遺構密度が高い。斑尾川寄り水田層が重層するが、年代の根拠は得られなかった。本遺跡は川久保遺跡5区と一体と推定される。



図9 調査区の全景

(5) 立ヶ花城跡 (北陸新幹線関連)

所在地および交通案内：中野市立ヶ花字表山
 上信越自動車道信州中野 IC から車で 2 分。
 遺跡の立地環境：千曲川右岸の丘陵上
 発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
18.7.10～ 7.31	3,000㎡	鶴田典昭

検出遺構：なし 検出遺物：鏝 (時期不明)

立ヶ花城跡は千曲川と篠井川の合流地点に位置し、対岸の手子塚城跡とともに、千曲川の舟運をおさえる格好の地とされている。調査対象区には、中世城郭にかかわる遺構、遺物は確認されなかった。調査区の北側隣接地には竪堀と考えられる窪地、南側の丘陵先端部には40mほどの平坦部がある。調査区内は主郭と丘陵先端の平坦部とを結ぶ通路であった可能性がある。



図10 調査区略図

みなみそみね
(6) 南曾峯遺跡 (北陸新幹線関連)

所在地および交通案内：長野市豊野町蟹沢

上信越自動車道信州中野ICから国道117号線を長野方面へ2km

遺跡の立地環境：千曲川左岸の丘陵上

調査期間	調査面積	調査担当者
18.5.8~7.31	100㎡	鶴田典昭

検出遺構

種類	数	時期
遺物集中	3	旧石器
土坑、ピット	15	平安ほか

検出遺物

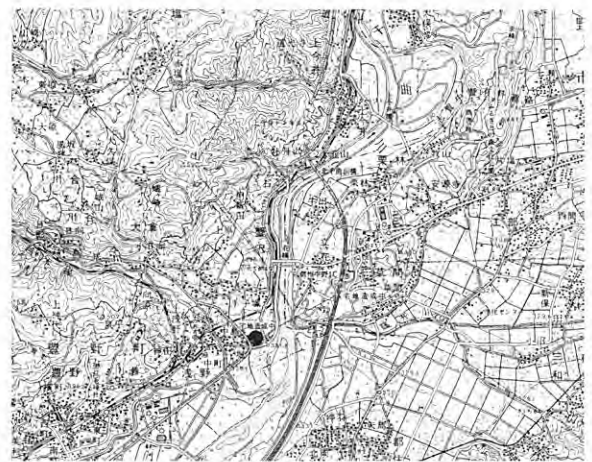
種類	時期・内容
土器	平安(甕)
石器	旧石器(ナイフ形石器、搔器、剥片、碎片)

千曲川に面した丘陵上に発見された旧石器
 丘陵上の①区で旧石器時代の調査を実施した。砂礫層をはさんで2枚の文化層があり、上層ではSQ(遺物集中)01、下層ではSQ02とSQ03の3ブロックを確認した。間層となる砂礫層は調査区東側に厚く堆積しているが、西側では確認できない場所もある。すべての石器について明確に文化層を区分できるわけではないが、上層の石器群が約1,600点、下層が約400点である。

上層のSQ01にはナイフ形石器や搔器とともに多数の碎片が出土した。石材は黒曜石が主体で、チャート、頁岩などがわずかに認められる。

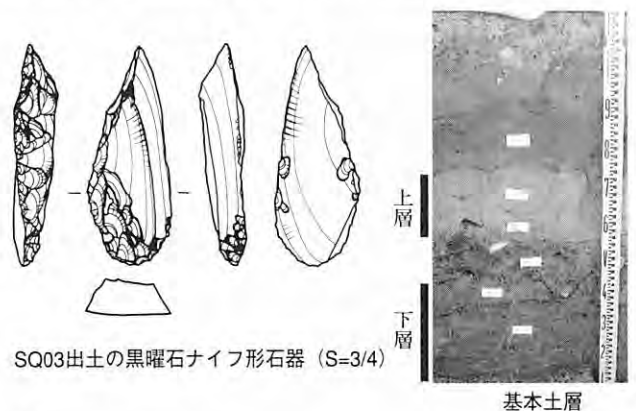


図11 礫層直上から石器群が出土した(SQ03)



下層のSQ03では横長剥片を素材にした黒曜石のナイフ形石器(図12)、頁岩の抉入削器などが出土した。SQ02・03の包含層はシルト質の水成層であり、遺跡周辺が隆起により離水し始めたころの堆積層と考えられる。また、その直下には旧鳥居川河床と推定される礫層がある。遺跡周辺は約3~4万年前に隆起が始まったとされている。SQ02・03形成時期には丘陵は存在せず、千曲河畔の微高地だったと想定されている。

平成5年に今回の調査区に近接した場所で採取され、中期旧石器時代の可能性があると指摘された石器群があるが、これらは、今回調査した石器群と同一層位に包含されていた蓋然性が高い。



SQ03出土の黒曜石ナイフ形石器(S=3/4)

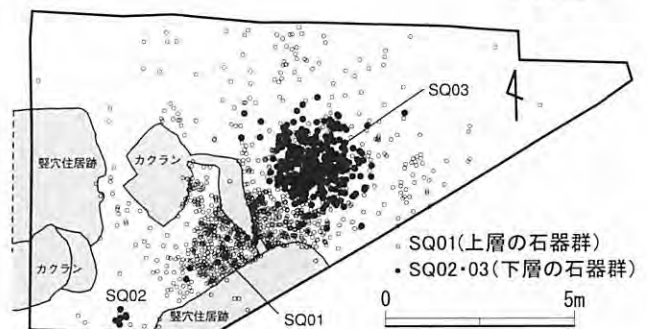


図12 石器分布状況と出土石器

おもてまち
(7) 表町遺跡 ((主) 長野荒瀬原線関連) あらせばら

所在地および交通案内：飯綱町牟礼字表町

国道18号線普光寺より旧北国街道（長野荒瀬原線）を、牟礼中心部を抜け長野市方面（南）へ約1.5km

遺跡の立地環境：長野市北部三登山北麓斜面の先端部 矢筒山麓へ続く緩やかな北斜面 みとさん

調査期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
18.4.26～ 11.30	5,200㎡	中野亮一 山崎まゆみ

検出遺構

種類	数	時期
竪穴住居跡	6	平安時代前期
掘立柱建物跡	7	戦国時代
大型竪穴状遺構	1	戦国時代
溝跡	4	戦国時代、江戸時代
井戸跡	5	戦国時代
土坑	880	縄文時代、平安時代、戦国時代

出土遺物

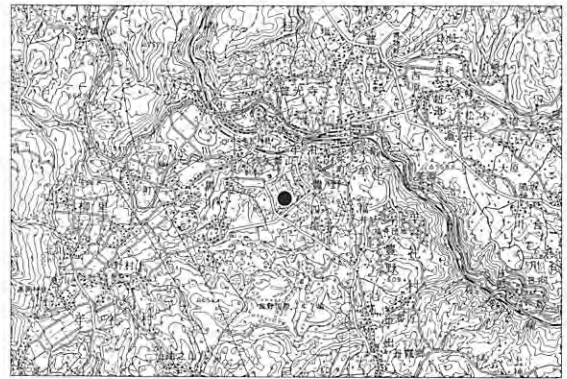
種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文時代、平安時代、戦国時代（甕、壺、内耳土器、カワラケ）、江戸時代
石器	縄文時代（打製石斧、石鏃）、戦国時代（石臼、茶臼、石鉢、凹石）

戦国時代に栄え、江戸時代に消えたムラ

表町遺跡は、戦国時代に築かれた矢筒城の南側に広がる緩やかな北斜面に立地する。県道建設工事に伴う発掘調査で、幅約20m、長さ約520mの道路用地にそった南北に細長くのびる調査区を設けた。昨年度から調査を開始し、2年目の調査となった。

調査区のほぼ南半分を対象とした昨年度調査では、湧水の激しい場所などを除き、調査区のほぼ全面で、戦国時代の掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡、土坑などを確認した。なかでも井戸跡は多く、16基ある。遺構から出土した炭化物の年代測定では、戦国時代にあたる16世紀前半ころとの値を得ている。

集落の広がり 本年度調査では、戦国時代の集落



が矢筒城跡に寄った北半部へ広がっていることが確認できた。

ただ、集中的な遺構は途切れており、そこが集落の北限と考えられる。この戦国時代の集落の規模は、東西は不明であるが、南北は約350mとなる。師岡平遺跡（茅野市）や神戸遺跡、三の宮遺跡（ともに松本市）など県内にある戦国時代集落の例から、このころとしては比較的規模の大きな集落といえよう。

集落内では、直線的に東西方向に走る溝跡が何条かみついている。師岡平遺跡の例では、室町時代後期～戦国時代において、屋敷地の境などに溝を掘る例が報告されている。本遺跡の溝跡も区画性をもつ可能性が考えられる。

集落内は掘立柱建物が基本で、それに付属して竪穴状遺構がいくつかみられる。掘立柱建物跡は、昨年度とあわせて約20棟確認している。調査では1,000基以上の土坑がみつかり、なかには柱穴跡も含んでいることから、さらなる建物跡の検討が必要である。



図13 戦国時代の大型竪穴状遺構

たてあな
堅穴状遺構は、一辺1m前後の規模のものが
多い。なかに1基だけ短辺2m、長辺15mの細長
い長方形の大型堅穴状遺構が確認された。遺物は
ほぼ1個体分の内耳土器、割れた石臼などが出土
している。床に柱穴や炉などの痕跡がないため、
用途に関しては、作業場、貯蔵施設などの可能性
が考えられる。今後、類例などの研究をおこない
たい。

昨年度は多くみつかった井戸跡は、本年度は5
基と少なかった。井戸跡のなかには検出面下4m
以上掘られていたものもある。しかし、木製品は
出土していない。遺物を多出する井戸との違いが
あるのだろうか。

出土土器は、内耳土器やカワラケなどが中心で
ある。なかに、北陸産珠洲焼甕・壺の破片があっ
た。北側に隣接する矢筒城館跡では、珠洲焼の破
片がみつかっており、城の使用と重なる時期に表
町に集落が営まれていたことがわかる。

本遺跡出土遺物の全体的な印象は、内耳土器や
農具、臼、ソリなどの庶民的な遺物が多く、青
磁、白磁、漆器などのような高級品は少ない。こ
うした遺物の傾向から判断して、上級層・支配層
というより一般的庶民を中心とした集落という印
象を受ける。

江戸時代に消えたムラ 戦国時代にはかなりの規
模にまで栄えた表町の集落だが、江戸時代初め
にはなくなってしまったようである。そう考える理
由の第一は、数多い戦国時代の遺物にくらべ、江
戸時代の遺物はほとんどないこと。第二は、牟礼
に残る江戸時代初期延宝六年(1678)の「室飯村
畑方検地帳」によると、表町周辺は畑地や荒地
ばかりであること。第三は、現在牟礼の中心と
なっている北国街道旧牟礼宿には、江戸初期の街
道、宿場の整備にあたり、祖先が表町から移され
たとの言い伝えが残っていることなどである。

最初の集落は平安時代 昨年度からあわせて堅穴
住居跡が7軒確認された。奈良時代以前の住居跡
は確認されず、遺物もないことから、この地に最
初に人が住んだのは平安時代と思われる。本遺跡
の南約300mにある西四ツ屋遺跡でも丘陵の斜面



図14 列をなす縄文時代の溝状土坑
に1軒だけ平安時代前期(9世紀ころ)の住居跡
がみつまっている。土器の様相から本遺跡住居跡
と同時期と思われる。

このころは小集落が散在する傾向があるとされ、牟礼周辺でも同じ状況がみてとれる。その後、戦国時代に至るまで遺構・遺物はない。

縄文時代は狩りの場 戦国時代以外での本遺跡の
特徴的な遺構として、動物を獲るための落とし穴
と考えられる溝状土坑がある。長さは1.5~2
m、深さ1mほどの細長くて深い穴である。獣類
が水を飲んだり、ヌタをうち(水場で体温を冷や
す動物の行為)にきたと考えられる水が集まる低
地部へ向かって、100m以上にわたって、4~8
mほどの間隔で並列につくられている。猟は、
土坑と土坑の間に垣をつくり、そこに、ある程度
の人数で、獲物を巻狩りのように追い込んだとい
われている。

落とし穴は、列によって大きさ、深さ、形状に
若干の違いがみられ、切り合い関係もあることか
ら、時間差をもってつくられたものであろう。県
内では小泉遺跡(飯山市)や仲町遺跡(信濃町)
など北信濃で広くみられ、全国的にも函館空港遺
跡(北海道)、発茶沢遺跡(青森県)はじめ東日
本一帯で確認されている。

調査はつづく 調査は一部残っており、来年度に
は発掘調査が終了する。未調査部分には現在は畑
だが、明治初めまで「オシャゴンジ」とよばれた
神社があったとされる。発掘によって周囲の集落
との関連などがみいだせれば、戦国時代集落の構
造解明の重要な一例となる。期待したい。

ひがしじょう
(8) 東 條 遺跡(国道18号坂城更埴バイパス関連)

所在地および交通案内：千曲市八幡字東條

JR 篠ノ井線^{おぼすて} 姨捨駅下車 千曲市営バス^{さいのもり} 斎の森
 神社前バス停下車

更埴ICより上田方面。平和橋を渡って「辻」
 交差点を左折、姨捨駅方面へ。

遺跡の立地環境：姨捨土石流台地から連なる押し
 出し地形の末端部 遺跡東端は千曲川左岸の後
 背湿地に隣接

調査期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
18.4.24～ 12.18	3,500㎡	岡村秀雄 小林秀行 山崎まゆみ

検出遺構

種類	数	時期
竪穴住居跡	10	古墳～奈良
掘立柱建物跡	13	古墳～奈良、中世
土坑	656	古墳～奈良、中・近世
礎石建物跡	2	中世
井戸跡	7	中世
溝跡、杭列	12	中世
木棺墓	1	中世
焼土跡、配石	17	中世
竪穴状遺構	8	中世
造成跡	1	近世

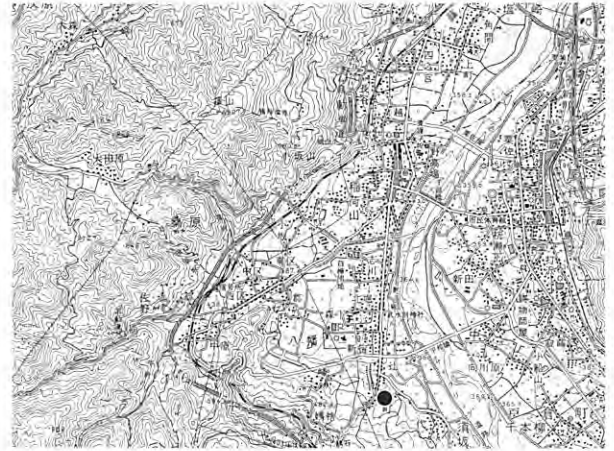
出土遺物

種類	時期・内容
土器	古墳 奈良(土師甕・高坏・甑、須恵坏・はそう)、中世(碗、水注、水滴、瓶子、火鉢、すり鉢、内耳)
石器	中世(砥石、石臼、石鉢、硯)
金属器	古墳(銀環)、中世(銅鏃、古銭、釘)
骨など	人骨、獣骨、種実
木製品	中世(木簡、箸、曲物、櫛、下駄、白木皿、漆椀、杭、角柱)

広がりをもせる中世の集落

昨年度からの継続調査である。昨年度の成果から、屋敷地の把握など集落のあり方が本年度調査のひとつの焦点であった。

本年度の調査では、調査区の広い範囲に中世の遺構・遺物が多数確認された。遺跡が押し出し地形の末端部に立地することにも起因して、石を多用した遺構が多く認められた点が特徴のひとつに



あげられる。石組の井戸跡が7基、50cm程の礎石を利用した建物跡が2棟(3間×3間、2間×1間)、20cm程の平石を2m弱の範囲に敷き詰めた跡や排水路と考えられる石列、石積みのある竪穴状遺構などを検出している。

また角材や丸太材を使った柱跡と杭列が集中して出土した地点や、柱の跡と考えられる小ピットが多数、木棺墓^{もつかんぼ}1基などが検出された。

これらの遺構は、検出面や土層のあり方、出土する遺物の検討から、少なくとも二時期(13世紀後半～14世紀前半、14世紀後半～15世紀)あったと考えている。各遺構を組み合わせた屋敷構えやその性格付けなどは、来年度の調査成果を含め今後も検討を重ねていく。

遺物は、遺跡が南西から北東に傾斜した地形に立地するため、調査区内の北東側で地形がかなり

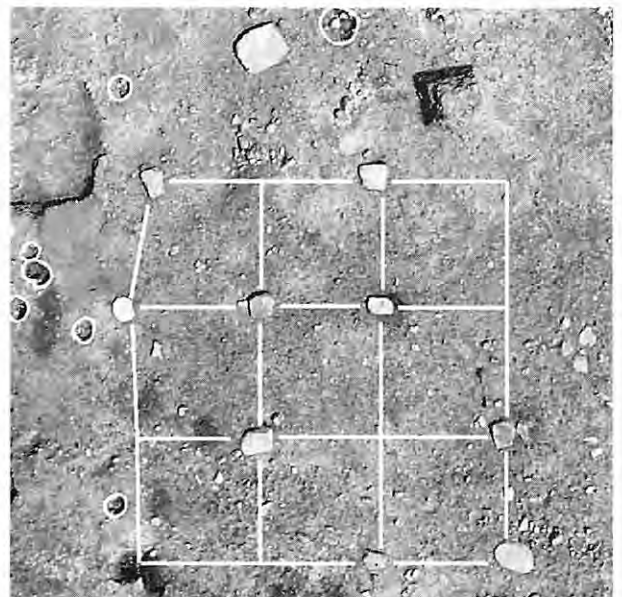


図15 礎石建物跡(3間×3間)

低く、木製品や骨（イヌ、ウマ、ウシ、シカ）などの出土が集中している。また、井戸によっては木製品が投棄されているものと、ほとんど遺物がない井戸があり、廃棄状況に違いがみられた。

県内最古の「蘇民将来符」木簡の出土

木製品のなかには呪符木簡がある（図16）。

木簡は長さ22.7cm、幅2.8cm、厚さ0.1cmで、頭部直下の左右に切り込みが入る。下部は2か所折れた状態であるものの完全な形を保っていた。墨書は両面に認められるが表面は風化が著しく、墨の跡は薄い。書かれた文字は、奈良文化財研究所の解読により、表面に「蘇民将来子孫人□（家カ）□」と記され、裏面には、セーマンと呼ばれる星（五芒星）が書かれている。この信仰に関する資料としては県内最古の資料である。出土地点は、角材や丸太材を使った柱跡や杭列が集中して検出された地点のなだらかな帯状の窪地内である。建物との関連が考えられる。

木簡の出土は、中部地域における庶民信仰の歴史解明に貴重な事例となるとともに、東條遺跡の集落の性格を考える上でも重要な資料となった。なお、遺跡の西に接する古道「一本松街道」や遺跡西側の「八日市場」という地名と遺跡との関連は、来年度調査の重要課題と考えている。



図16 呪符木簡「蘇民将来符」

(9) 峯謡坂遺跡

(国道18号坂城更埴バイパス関連)

所在地および交通案内：千曲市八幡字謡坂

武水別神社の南側、「辻」交差点から聖峠に向かい県道姨捨停車場線を走った左側の尾根上の地点。

遺跡の立地環境：千曲川の左岸 姨捨の地滑りで形成された尾根上

調査期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
18.10.1～ 10.31	850㎡	岡村秀雄

出土遺物

種類	時期・内容
土器	平安（須恵坏）

本年度は、16年度に調査した尾根上端部の南斜面にあたる。調査区にトレンチを5本設定した結果、調査区の現状は昭和50年ごろ造成された客土（1～2m強）により平坦になっているが、以前は、急傾斜地で、耕作がおこなわれていたことが判明した。出土した5点の遺物は、この旧耕作土にあたる黒色土中から得られ、遺跡中心部となる尾根上からの流れ込んだものと判断した。

今回の調査区は、遺跡の中核部分からはずれた一帯で、遺物散布地として位置づけられる。



図17 斜面の遺物散布地

ちからいしじょうり かみごみょうじょうり
(10) 力石条里遺跡群 上五明条里水田址
 (県道長野上田線力石バイパス関連)

所在地および交通案内

力石条里遺跡群：千曲市上山田字岩井堂
 県道長野上田線力石交差点から長野方面へ約500mの市営住宅の南。岩井堂山の北東。
上五明条里水田址：埴科郡坂城町上平字出浦
 県道長野上田線村上交差点から長野方面へ約500m竹内製作所角を北西に入る。岩井堂山の東。

遺跡の立地環境：千曲川左岸の沖積地。

力石条里遺跡群の概要

調査期間	調査面積	調査担当者
18.4.17～ 12.15	6,100㎡	西 香子 市川桂子

本年度は、力石集落西側の2地区と南側の3地区で調査をおこなった。

西側の2地区は、弥生時代後期の^{たてあな}竪穴住居跡1軒、溝跡1条、奈良・平安時代の溝跡3条、鎌倉時代以降の土坑68基などを確認した。南側の3地区では弥生時代前期末～中期初頭の焼土跡1基、後期の土坑1基、東西に走る幅14m程の自然流路2条、古墳時代以降の^{けいはん}畦畔11条、奈良・平安時代以降の溝跡18条、鎌倉時代以降の^{ほったてばしら}掘立柱建物跡1棟などを確認した。遺物は弥生時代前期末～中期初頭や後期の土器、石器、奈良・平安時代の土器、鎌倉時代以降の陶磁器などである。

南側の3地区は、水田などの生産域として使われたり掘立柱建物が建てられた時期もあったものの、ほとんどの時期で流路またはその^{はんらんげん}氾濫原であったと思われる。



図18 奈良・平安時代の水田跡



上五明条里水田址の概要

調査期間	調査面積	調査担当者
18.10.26～ 12.15	950㎡	西 香子 市川桂子

平成10年度以降、数回にわたり緊急発掘調査がおこなわれ、奈良・平安時代の集落跡や、それ以降の水田跡などが確認されている。本年度は、路線西側の地区と、東側の地区の2か所で調査をおこなった。

西側の地区では、奈良・平安時代の溝跡3条、水田跡1面、奈良・平安時代以降の土坑2基を確認し、平安時代の土器、石器、鎌倉時代以降の陶磁器が出土した。溝跡と水田跡は、厚さ20～60cm程の洪水砂に覆われており、保存状態は良好で、水田跡からは畦畔が9条確認された。また、奈良・平安時代以降の土坑のうち1基からは馬の歯が出土した。

東側の地区では、奈良・平安時代の竪穴住居跡7軒、溝跡5条、土坑21基を検出し、平安時代の土器、石器が出土した。このことから、東側の地区では、奈良・平安時代の集落が営まれていたことが確認された。また、東側の地区では、厚い洪水砂の堆積は認められなかった。

東西の地区でこのような土地利用の違いが認められたことは、千曲川の氾濫や流路の移動によって形成された微地形に起因する。なお、東側の地区は、遺構検出のみをおこない、本格的な調査は19年度に実施する予定である。

上五明条里水田址と力石条里遺跡群は、行政区画により別遺跡となっているが、遺跡は一体のものとしてとらえることができる。

わだはら
(11) 和田原遺跡群 (中部横断自動車道関連)

所在地および交通案内：小諸市和田字権現堂ごんげんどう

上信越自動車道佐久平ICから旧国道141号線を小諸方面へ3km

遺跡の立地環境：浅間山麓の南西、湧玉川わくたま右岸の田切り地形によって形成された台地上。

発掘期間等

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
18.8.21～ 9.21	1,935㎡	柳澤 亮

検出遺構

種類	数	時期
竪穴住居跡	1	奈良
土坑	3	奈良以降
溝跡	4	奈良以降

出土遺物

種類	時期・内容
土器	奈良 (須恵器・蓋、土師甕)
石器	奈良 (台石)
その他	奈良 (鉄釘)

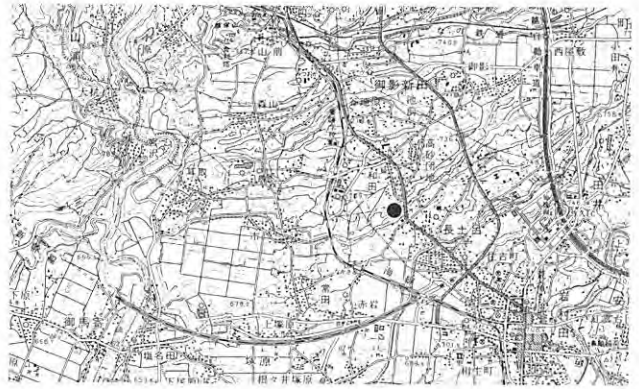
奈良時代の集落を垣間見る

和田原遺跡群全体は湧玉川北岸の田切り地形に画された台地上に大きく広がる。今回の調査地点は佐久市長土呂ながとろ所在の古社「近津神社」からみて北西の対岸にあり、湧玉川を見下ろす崖上に立地する。小諸市ではこれまでに遺跡群内3か所の調査を実施している。今回の地点より1km上流に古墳時代、1km下流に古墳・奈良・平安時代から中世の集落跡の報告がある¹⁾。

今回の調査でみつかった住居跡は重複関係がなく、比較的残存状況は良好である。平面方形



図19 和田原遺跡群の全景 (南西より)



(5.6×5.6m)で4本柱、北壁中央にカマドを置く。遺物量は少ないが須恵器すえきつき坏や坏蓋、須恵器つぎふた甕、土師器かめ甕など器種は多様である。奈良時代、8世紀前半の所産と考える。

この地点から奈良時代の住居跡が見つかったことは、北西につづく広大な農地に同期の集落が包蔵されていることを充分予想させる。そして湧玉川の対岸(南側)に位置する大規模な古代集落である、佐久市西近津遺跡群などとの関連性を考える上でも意義深い。

なお溝跡4条については現時点ではその使用時期や目的は不明である。1条はほぼ方形に区画される平面形を推測できるが、南側を崖の崩壊によって失落されていて全容はわからない。それ以外の溝跡は崖線と直交する方向に1条、ほぼ平行する方向に2条ある。

また本調査区北に隣接する未買収地(現在の墓地)については、隣接区の調査内容から調査不要と判断した。

1) 小諸市教育委員会1989『和田原・鎌田原』、同1995『古屋敷』、同2002『油久保』



図20 竪穴住居跡と出土土器

にしちかつ
(12) 西近津遺跡群 (中部横断自動車道関連)

所在地および交通案内：佐久市長土呂字森下
 小海線の^{なかさと}中佐都駅から市道近津中佐都線を近津神社方面(北東)へ約300m。市道の東側は^{ぼうぼた}防畑遺跡群である。

遺跡の立地環境：浅間山麓に形成された田切り地形の末端近く、標高705~707mの丘陵上。北側は^{わくたま}湧玉川に切れ、南側は^{にこり}濁川の氾濫低地に向かって緩やかに傾斜する。

調査期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
18.6.22~ 12.22	4,000㎡	寺内隆夫 寺澤政俊 白沢勝彦 柳澤 亮 土屋哲樹 河西克造 櫻井秀雄

検出遺構

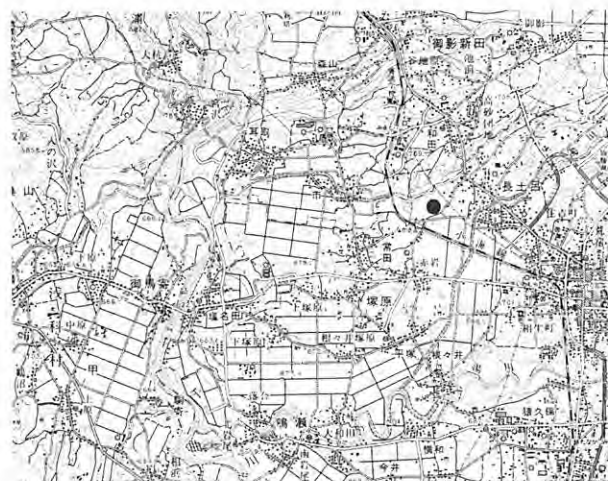
種類	数	時期	備考
竪穴住居跡	177	弥生後期、古墳後期~鎌倉	このほか検出だけおこなった住居跡31軒
掘立柱建物跡	14	奈良~中世	組めない中世以降の柱跡多数
溝跡	10	弥生~中世以降	
土坑	416	弥生、古代~近世	

出土遺物

種類	時期・内容
土器 陶器	縄文後期(深鉢)、弥生(鉢、甕、高坏、壺)、奈良・平安(甕、坏)、中世(青磁碗)
土製品	縄文(土偶)、弥生(人面付き土器片、二股勾玉、紡錘車)
石器 石製品 ガラス製品	縄文(石鏃)、弥生(磨製石斧、磨製石鏃、磨石、管玉、ガラス玉)、奈良・平安(砥石)
金属器	弥生(銅釧、銅鏃、鉄鏃) 奈良・平安(鉄鏃、刀子ほか)

濁川氾濫低地に南面する複合遺跡

長期にわたり利用された居住地 本年度の調査区は、南側の濁川^{はんらん}氾濫低地に向かって緩やかに傾斜する場所にあたる。ここでは地表面から地山となる浅間軽石流堆積層まで20~50cmと浅く、漸移



層~地山面で複雑に重複した遺構が検出された。

出土遺物は、縄文時代後期から中世におよぶ。特に、弥生時代後期以降は遺構が密集し、長期にわたり、断続的に居住地として利用されている。弥生時代後期に成立する集落 この地点に集落が成立するのは弥生時代後期である。竪穴住居跡が集中するのは丘陵南側の緩傾斜地であり、ここが集落の中心的位置にあたると思われる。これに対し、北側の丘陵尾根筋付近では遺構が激減する。集落内には大型住居が存在し、銅釧片を出土する住居が複数存在するなど、一時期隆盛を誇るようである。しかし、この地区内で古墳時代前期への継続は認められない。

国内最大級の大型竪穴住居跡 ここでは、本年度の成果として、弥生時代では国内最大級となる大型竪穴住居跡について取り上げておくこととする。

SB67と命名した竪穴住居跡は、集落の中央や



図21 大型竪穴住居の調査状況

や北東寄りに位置している。

平面形は長方形を呈し、主軸はN11° Eである。検出面での平面規模は18m×9.5m、立ち上がりは最深部で75cmを測る。床面積は153㎡（46坪）におよぶ。

主柱穴は4本のみで、桁行き柱穴間の距離は9.2mに達する。この間に補助柱穴が認められた。主柱穴の平面形は長軸に対し横長の長楕円形を呈する。また、断面形は柱材の設置あるいは抜き取りのために段掘り状となっている。柱痕跡はとどめていないが、柱穴最深部の形状から推定すると断面長方形の材が使われた可能性がある。奥壁近くには棟持ち柱穴が1本認められ、主柱穴と同様の形状を示している。一方、南側入口部には梯子穴とみられる長楕円形の柱穴が並列して認められ、その脇には貯蔵穴の可能性をもつ穴が存在する。

炉は4基確認され、主炉は北側柱穴間よりやや奥壁寄りに設置されている。住居中央やや北寄りの炉2基は、位置的には拡張前住居に伴っていた可能性もある。ただし、埋設土器上端が床面上に突出しており、大型住居の段階でも使用されていたとみられる。また、南西柱穴に近接して副炉が認められる。これほどの大型住居であるにもかかわらず、長楕円形を呈する柱穴平面形を含め、上記の住居基本構造は中・小規模の堅穴住居跡とほとんど変わっていない。

床面からまとまった土器の出土はなく、覆土中からも破片資料が大半である。特記すべき遺物としては、覆土中から銅釧片、鉄鏃が各1点、床



図22 国内最大級の堅穴住居跡

面からガラス小玉が1点、柱穴内から銅釧片が1点、床下から穿孔された石製品が1点出土した。

今後、住居構造の復元、掘立柱建物跡がみつからない現状での集落内における性格づけや使用方法、あるいは周辺集落を含めた中での位置づけなどを検討していきたい。

古墳時代後期から平安時代の集落 この地区が再び居住地になるのは古墳時代後期で、以降、中世前半期までほぼ間断なく遺構が認められる。

古墳時代後期の堅穴住居跡は調査区の南西側に比較的まとまっており、調査区全体に遺構が広がるのは奈良時代末期以降である。特に、平安時代には碁盤目状に区画溝が掘削され、堅穴住居跡のほか、居住施設（側柱建物）や倉庫（総柱建物）と考えられる掘立柱建物跡が広域に展開する。本調査区は、佐久郡衙推定地から約700mの地点であり、来年度以降の調査で、関連施設や遺物の発見が期待される。

中世前半期の集落 平安時代の後半、一時期集落が断絶するが、平安時代末期から中世前半期には、再び小規模な堅穴建物跡や井戸跡、柱穴群がみられるようになる。

来年度調査へ向けて 来年度は、西近津遺跡群がのる丘陵を横断する形で北側を調査する。弥生時代後期については居住域の北限が確認できると考えられる。また、佐久郡衙推定地に近いことや、古東山道の推定地の一つにもなっていることから、古墳時代以降の土地利用についても注目する必要がある。



図23 弥生土器が出土した堅穴住居跡を調査する

すほうばた
(13) 周防畑遺跡群 (中部横断自動車関連)

所在地および交通案内：佐久市長土呂、塚原

JR 小海線佐久平駅より西へ500m

遺跡の立地環境：濁川右岸の微高地上

調査期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
18.4.24～ 12.19	38,800㎡	上田 真 市川桂子 西 香子 廣瀬昭弘 廣田和穂 柳澤 亮 綿田弘実

検出遺構

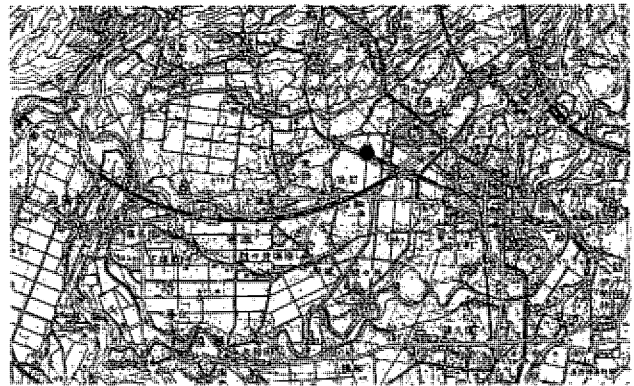
種類	数	時期
竪穴住居跡	95	弥生中期3、後期52、古墳1、平安36ほか
掘立柱建物跡	9	弥生後期1、平安8
円形周溝墓	15	弥生後期
土坑墓	1	弥生後期
土器棺墓	4	弥生後期
溝跡	33	弥生後期、平安、中世
土坑	422	弥生後期、平安

検出遺物

種類	時期・内容
土器 土製品	弥生 (甕、壺、高坏、匙形土製品)、古墳 (土師甕)、平安 (土師坏)
石器	弥生 (打製石斧)、平安 (砥石)
金属器	弥生 (銅釧)、平安 (刀子、銭貨)
玉類	弥生 (ガラス小玉、管玉、勾玉)

微高地上に点在する集落遺跡

調査範囲と旧地形 周防畑遺跡群は、北西—南東が約500m、北東—南西が約3,000mの長大な遺跡群である。1980年にはほ場整備に伴い今回の調査対象地の北東部が調査され(図24)、微高地であったAからC地区で弥生～平安時代の竪穴住居跡94軒、掘立柱建物跡11棟、円形周溝墓2基などが密集した状態で検出された。これらの一部は発掘調査されたが、今回の調査地と重複、隣接するC地区の大部分は盛り土保存の後、ほ場整備が実施された。これにより、いくつもあった「流れ山」とよばれる小丘が削られ、低地が埋められて、階段状に南西に下がる平坦地となり、旧地形はほとんど失われている。したがって、現地形から遺構の分布範囲の推定は困難であり、まず対象



地全域のトレンチによる試掘調査をおこなった。

試掘調査の結果、対象地を東西に横切る道路や鉄道と、南北に走る農業用水路で区切った1～7区(図24)のうち、市道には含まれた1区は低地で複数の旧流路が走るが遺構はなく、市道とJR小海線の間2・3区北部は微高地となり遺構を確認した。小海線をはさむ2・3区南部から4区および5区北部は低地となり、3区南部では砂に覆われた水田面を検出した。小海線と市道間の5区中・南部は、再び微高地となって遺構が存在し、5区最南部から市道をはさんで北陸新幹線までの6区は低地で無遺構であった。新幹線南側の7区は流れ山の痕跡があるが、小規模で傾斜も急なため、遺構は存在しなかった。この結果を踏ま

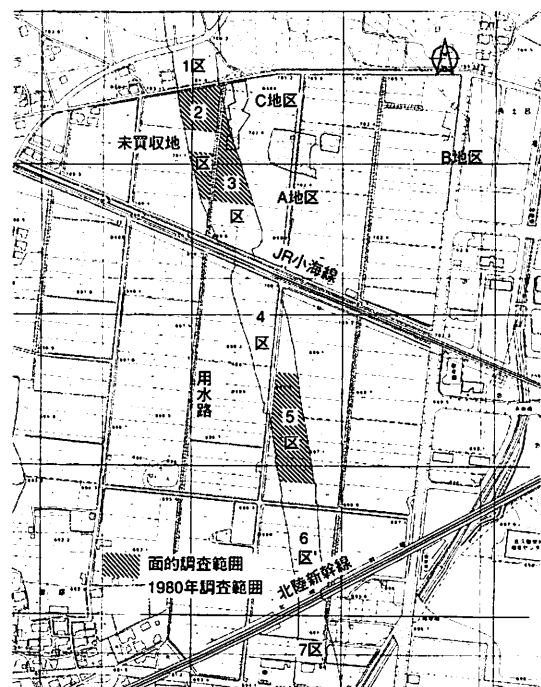


図24 周防畑遺跡群調査範囲と1980年の調査地区 (1:5,000)

えて、2・3区北部、5区中・南部と3区中部を面的調査することとした。

2・3区の概要 2・3区で検出したのは弥生時代後期の堅穴住居跡35軒、同土器棺墓1基、古墳時代後期の堅穴住居跡1軒、平安時代の堅穴住居跡37軒、同掘立柱建物跡8棟、井戸跡2基などである。平安時代の堅穴住居跡は2・3区の南側に多く、北側ではまばらになっている。しかし、北側でも表土からは平安時代の遺物が多量に出土しているから、おそらくほ場整備によって住居跡の多くが削平されたものと思われる。

一方弥生時代の住居跡は、2・3区の北半部に限られている。南半部には土器棺墓が1基検出されており、こちらは墓域として利用されていた可能性がある。この土器棺墓からは管玉6点とガラス小玉23点が出土している。

そのほか、2区の北西部に1区から繋がると思われる自然流路が2条横切り、弥生時代の住居跡3軒を切っている。流路出土遺物のほとんどは弥生時代と平安時代の土器であるが、底面近くから北宋銭の「熙寧元寶」(1068年初鑄)や、非常に遺存状態のよい馬歯1体分が出土しており、中世以降に濁川かその支流が暴れてできた流路と思われる。

2・3区で注目されるのは、弥生時代では前述の土器棺墓のほか、 $8.2 \times 6.8\text{m}$ と本調査区最大の堅穴住居跡SB12、同一個体の高坏の脚部が床上に据えられ坏部が床面に埋設されて出土しているSB51などである。平安時代では、 $2.7 \times 4.9\text{m}$ と狭長で中央に石組みの炉、東壁に特異な石組みのカマドをもち、羽口が出土していることから鍛冶工房跡と思われるSB37、底に孔のあいた石鉢2点と灰釉陶器碗が共伴する井戸SK208、2.2mの距離を置いて並び、完形やほぼ完形の灰釉陶器碗や皿、土師器坏がまとまって出土した祭祀跡と考えられるSK59・60などがある。SK60出土の灰釉陶器輪花碗2点の底面には「本」の字が墨書されている。このように墨書土器を含む灰釉陶器の多出や、柱の沈み込み防止のための礎石をもつ掘立柱建物跡ST06の存在、3区表土での川原寺式の軒丸瓦の瓦当の出土などは、本調査区が一般集

落とは異なる官衙周辺遺跡であることを伺わせる。

5区の概要 5区で検出されたのは、弥生時代中期の堅穴住居跡3軒、同後期の堅穴住居跡17軒、掘立柱建物跡1棟、円形周溝墓15基(うち1基は方形の可能性もあり)、土器棺墓3基などである。居住域と墓域は一部重なりをもつが、堅穴住居跡が東の微高地側に片寄るのに対して、周溝墓は西側の4区低地への落ち際に多く、両者に時間差はあったにせよ、漠然とした居住域と墓域の区別の意識はあったものと思われる。

住居跡は中期、後期のものとも隅丸長方形で、 $4 \times 4 \sim 9 \times 7\text{m}$ と北区と同規模であるが、分布密度は低い。円形周溝墓は、周溝の外径が $4.5 \sim 7.0\text{m}$ 、周溝の幅が $50 \sim 80\text{cm}$ で、その内の4基で $1.5 \times 0.8 \sim 3.5 \times 1.4\text{m}$ の長方形の主体部を検出している。主体部に木棺の小口穴はないため、木棺の使用の有無は不明である。出土遺物も土器片少量のみと質素である。住居跡密度が低く、居住域と墓域の混在する様子は集落の縁辺的な部分であることを思わせる。

本地区で特筆されるものとしては、墓坑のSK5067がある。SK5067は、弥生時代後期の堅穴住居跡SB506を切ることから、それよりは新しいもののそれほどの時期差はない。周溝がない墓坑であるが、3連の銅釧が出土している。このように周溝墓と混在するなかでの、周溝をもたない墓からの金属器の出土というあり方は、一昨年調査した佐久市西一里塚遺跡の、螺旋状鉄釧とガラス小玉、乳歯が出土した木棺墓SM07とも共通するものがあり興味深い。



図25 SK5067銅釧出土状況

(14) 濁り遺跡 久保田遺跡

(中部横断自動車関連)

所在地および交通案内：佐久市平塚、塚原

JR 佐久平駅から国道141号バイパスを経て、県道塩名田佐久線（旧中山道）を旧浅科村方面（西）へ進み約1 km

遺跡の立地環境：濁川右岸の標高約690m 前後の低地および残丘

調査期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
18.9.20～ 11.14	濁り 7,400㎡ 久保田 6,150㎡	桜井秀雄

検出遺構

種類	数	時期
掘立柱建物跡	2	平安時代
溝跡	1	平安時代
土坑	34	平安時代

出土遺物

種類	時期・内容
土器	平安（坏）
石器	弥生（石鏃）
木製品	平安（下駄、曲物、柱材）
金属器	平安（銭貨）

低地に営まれた平安時代の小集落

両遺跡は主要地方道下仁田浅科線と県道塩名田佐久線（旧中山道）の間に位置する。この間の地形は、低地と「流れ山」と呼ばれる残丘からなり、低地では流路がいく重にも流れている。



図26 掘立柱建物跡



なお、現耕土直下には近在する西一里塚遺跡や周防畑遺跡ではみられない昭和34年の伊勢湾台風による洪水砂層の堆積が確認され、それ以前の畑の畝や水田の畦畔がそのままの状態で見保されていた。こうした共通する地形環境に立地する遺跡であるため、今回は一括して報告することとした。

久保田遺跡は今回の調査区ではその大部分が低地にあたり、遺構は検出されなかったが弥生時代～中世の土器片が散布していた。

濁り遺跡でも低地では流路が多くを占めていたが、調査区東側の台地近辺部の低地では平安時代の掘立柱建物跡2棟、溝跡および土坑を検出した。2棟の掘立柱建物跡はともに2間×1間の側柱式である。注目されるのは、2棟とも柱材を残す柱穴が確認されたことであり、貴重な資料となった。ほかに遺構外から曲物、下駄などの木製品も出土している。

このように濁り遺跡では後世の流路により削平された部分もあるが、平安時代の一時期には低地の一部で小集落が営まれていた。



図27 柱穴に残された柱材

にしいちりづか
(15) 西一里塚遺跡 (中部横断自動車関連)

所在地および交通案内：佐久市岩村田、平塚

JR 佐久平駅から国道141号バイパスを経て、県道塩名田佐久線(旧中山道)を旧浅科村方面(西)へ進み、約1km。

遺跡の立地環境：濁川右岸の標高約690m前後の台地部および低地

調査期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
18.4.18～ 9.11	8,400㎡	桜井秀雄 土屋哲樹

検出遺構

種類	数	時期
水田跡	3	平安～江戸
掘立柱建物跡	1	弥生
河川跡溝跡	14	弥生
土坑	13	弥生

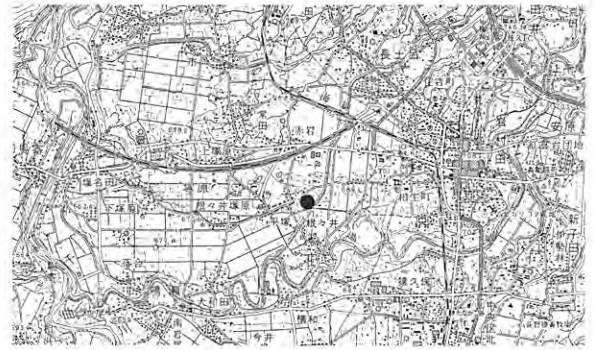
出土遺物

種類	時期・内容
土器	弥生(高坏、甕)
石器	弥生(石鎌、たたき石)
金属製品	中・近世(銭貨ほか)
木製品	弥生時代(建築材、鋏先、鋏の柄)

弥生時代～近世の低地利用

発掘調査の最終年度にあたる今回の調査区は、台地部と低地部に分かれた。

台地部では弥生時代後期の掘立柱建物跡1棟、土坑12基などを検出した。一方、低地部では弥生時代から江戸時代までの4面の調査を実施し



た。このうち第1～3調査面では洪水砂に覆われた平安時代から江戸時代までの水田跡3面が検出されている。いく度となく洪水にあいながらも、この低地は平安時代からは水田として利用されていることが判明した。

第4調査面では、弥生時代後期の河川跡、溝跡および形態的特徴から井戸跡と考えられる土坑1基が検出された。弥生時代後期の段階では、この低地は河川の流れる場であり、まだ水田としては利用されていなかったことが理解できる。

東西方向に流れる河川跡は幅数mの大規模なものであり、土器とともに多様な木製品が出土している。土坑は調査区南西際の台地から低地へ地形が落ち込む縁辺部で検出され、ここからも木製品が出土している。

土坑から出土した木製品には、曲柄平鋏の柄部および直柄平鋏の身部、建築部材などがある。また河川跡からは、直柄平鋏の身部や樋などが出土した。佐久地方において弥生時代の木製農具の出土事例はこれが初めてであり、貴重な資料となった。

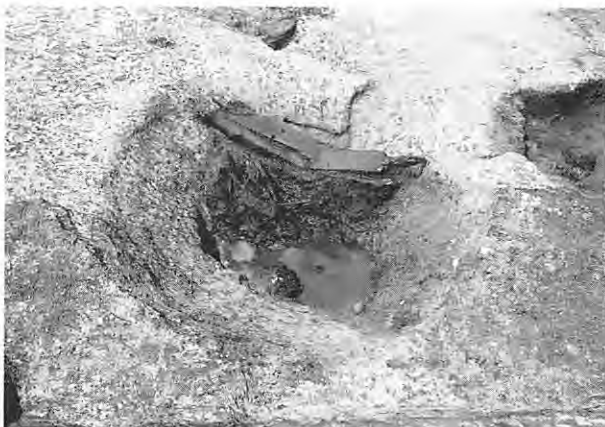


図28 木製品を出土した土坑 (SK101)



図29 木製品出土状況 (SK10)

もりだいら
(16) 森平遺跡 (中部横断自動車関連)

所在地および交通案内：佐久市横和字森平
 小海線北中込駅から県道上原猿久保線を浅科方面(西)へ2.7km、湯川を北に渡る。

遺跡の立地環境：東から西へ流れる湯川が南北に蛇行し形成した半島状の低段丘上(水面から5~10m)

調査期間等

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
18.4.18~ 6.21	2,500㎡	寺内隆夫 寺澤政俊

検出遺構

種類	数	時期
竪穴住居跡	11	弥生中期
掘立柱建物跡	1	弥生中期
配石遺構	2	弥生中期
溝跡(環濠も含む)	3	弥生、古代~中世
土坑	8	弥生中期

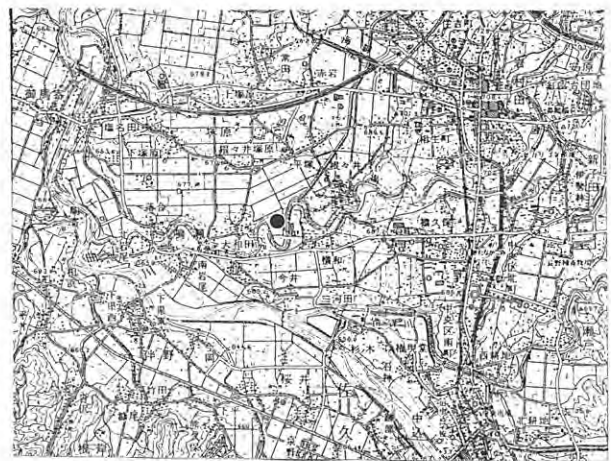
出土遺物

種類	時期・内容
土器	弥生中期(壺、甕、鉢、碗など)
石器	弥生中期(磨製石器など)縄文(打製石斧など)
金属器	古代(鉄釘など)

弥生時代中期、低段丘上の環濠集落

環濠のある集落 集落は東、南、西を湯川の蛇行する流れに囲まれ、半楕円形の半島状の地形に立地する。北側を東西に環濠で画される。環濠の北と南(幅約10m)には、遺構のないことを確認した。環濠は西側部に向かって自然傾斜の低位でなくなる。東西に長さ約50m、幅2~3m、底部の幅約50cm、深さ1.5~2.0mを測る。断面形はすり鉢状をなす。

建て替えの繰り返された竪穴住居跡 4軒の竪穴住居跡に貼り床の重複(1~2cm間隔)が確認された。検出された柱穴、壁溝や炉跡の位置と数から、同一の竪穴を拡張したと判断できる。住居を簡単に廃棄、移動することなく、弥生時代中期



の短期間に建て替えを繰り返したことがわかった。

弥生時代中期特有の磨製石器 太形 蛤 刃石斧、扁平片刃石斧、磨製石鏃などが出土した。またこれらの未製品や破損品、多量の剥片もある。石材は輝緑岩や粘板岩、チャートなどである。住居内から各種の砥石も出土しており、他地域から製品に近いもの、あるいは原石が搬入され、加工や修理がおこなわれていたものと考えられる。弥生土器の包含層低位では打製石斧や黒曜石の石鏃も出土している。

遺跡の状況 平成16年に確認された遺跡であったため、すでに道路工事により掘削された範囲が多かった。しかし2か年にわたる調査で、湯川流域の低段丘上に営まれた弥生時代中期の環濠集落内の北東部の状況が明らかになった。現在、佐久市教育委員会で南側市道部分の調査がおこなわれており、その成果もあわせて遺跡の全容が明らかになることを期待している。



図30 弥生時代中期の磨製石器

いまいみやのまえ
(17) 今井宮ノ前遺跡 (中部横断自動車関連)

所在地および交通案内：佐久市今井字宮ノ前

上信越自動車道佐久ICから国道141号線を白田方面へ進み、三河田工業団地を西へ2km、今井地区の西方。

遺跡の立地環境：浅間山の南西、千曲川右岸標高約670mの台地上。南辺を断崖で切られる。遺跡内は、北東から南西へ緩やかに傾斜する。

調査期間等

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
18.4.25～ 6.22	5,000㎡	白沢勝彦 柳澤 亮

検出遺構

種類	数	時期
土坑ピット	100	中・近世
井戸跡	4	近世
墓坑	1	近世
溝跡	6	近・現代

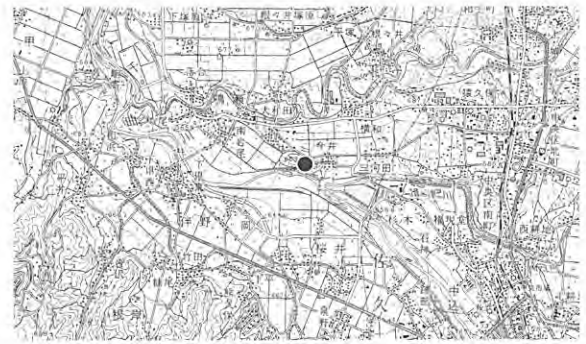
出土遺物

種類	時期・内容
土器 陶磁器	弥生(高坏) 中・近世(碗、カワラケ)
石器 石製品	縄文(打製石斧) 近世(白、茶白)

苦心のほどがうかがえる井戸跡

50基を越える直径20cm前後の小ピットが、調査区南側と中央西側半分に片寄りつつ、それぞれの中で分散して検出された。そのなかには、間隔は不均一であるが3～6基で長さ4～6m規模の列状に並ぶものが複数あり、掘立柱建物の柱穴になる可能性がある。小ピットの一つから15～16世紀代のカワラケ片が確認されたことから、時期を中世以降と想定している。

調査区の南西寄りで、直径1.2～4m、深さ0.6～1m規模の土坑4基を検出した。このうち、規模の最も大きな1基では内壁の約1/3の範囲に人頭大の扁平礫を主とする石積みが見られた。4基いずれも、固く締まった岩屑層からなる基盤の上に耕作土がのった縁に沿うように掘り込まれている。岩屑層が水を通しにくいことから、一定の保水力があったと考えられ、雨水が簡単に抜け



落ちてしまうような崖の上を耕地として利用するために設けられた灌漑用の井戸跡と考えている。井戸跡の1基から17世紀代前半の陶器碗片が出土したことから、つくられたのは同時期以降と考えられる。

また、井戸跡のひとつに隣接して、人骨を埋葬した墓坑を検出した。これに形状や規模の特徴が極めて近いことから、同一時期とみられるもう一つの土坑(人骨未確認)が井戸跡を切っているの、墓坑が掘られた時期は井戸がその役割を終えた以降となる。

溝跡は水路とみている。その方向と区画が現水田の規格と異なるため、旧水田造成以前のものであろう。

なお、当遺跡南東に隣接している中世の「今井城跡」に関連する遺構は検出されなかった。このことは、双方の間を隔てる深い谷地形がかかわっていると考えられる。現在、城館跡の東側に広がる今井地区には中世の集落形態の特徴が残されており、城館に関連する遺構群は東に展開する可能性が高まってきた。



図31 扁平礫の石積みが残る井戸跡

みしゃぐうじ
(18) 御社宮司遺跡

(国道20号坂室バイパス関連)

所在地および交通案内：茅野市宮川

中央自動車道諏訪 IC から国道20号線を甲府方面に約 4 km

遺跡の立地環境：諏訪盆地の南側、上川と宮川の氾濫で形成された沖積低地

調査期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
18. 4. 21～ 9. 25	5,000㎡	河西克造 藤原直人

検出遺構

種類	数	時期
水田跡 (含、畦畔)	2	江戸
大畦畔	1	江戸以降
掘立柱建物跡	3	中世
竪穴建物跡	1	中世
土坑	14	中世 (含、墓坑 1)
竪穴	49	江戸以降
焼土跡	1	中世
土器集中	3	中世
溝跡	6	中世

出土遺物

種類	時期・内容
土器、陶磁器	縄文晩期 (鉢)、平安 (灰釉壺、須恵坏)、中世 (カワラケ、内耳)、江戸 (皿、碗)
石器	縄文 (石鎌、凹石)
金属器	中・近世 (鉄釘、銭貨、煙管)
その他	中世 (土錘、鉄滓)

短冊状に区画した江戸時代末期の水田と竪穴

御社宮司遺跡は、遺跡内のほぼ中央部を中央自動車道が横断しており、20号バイパス用地は中央道と交差する。本年度、中央道両側にわたる調査では、中世と江戸時代の遺構が広範囲に確認され、起伏に富む複雑な地形と土地利用形態が判明した。

江戸時代では砂に覆われた水田跡と埋没後に構築された方形の竪穴が注視される。出土遺物から江戸末期ころに帰属する。水田跡は狭い間隔で畦畔状の高まりが縦方向に並列するもので、中央道



調査で確認された遺構 (「畦畔状遺構」) と類似する。特異な構造を示すこの水田は、水田耕作における裏作もしくは水田域を別な用途で使った可能性を示すものと考えられる。竪穴は水田区画の主軸に寄って複数並置し、別地点の竪穴には壁面に金属工具と思われる掘削痕も確認できた。水田と竪穴の性格は、科学分析結果とあわせて解明したい。

中央道北側で確認された中世の集落は、今回新発見である。集落は掘立柱建物跡と竪穴建物跡を主体とし、焼土跡や完形のカワラケを設置した土坑が付随するもので、周囲に内耳土器を副葬した墓坑が分布する。遺構分布から、宮川などの河川で形成された微地形を利用した集落景観をみる事ができた。

本遺跡については、来年度を含めた3か年の調査成果に中央道建設に伴う過去の調査成果をあわせて、遺跡の全容が解明していきたい。



図32 短冊状に配置する畦畔状遺構と竪穴

ひがしたかとおわかみや
(19) 東 高遠若宮武家屋敷遺跡

(国道152号高遠バイパス関連)

(県宝旧馬島家住宅庭園整備関連)

所在地および交通案内：伊那市高遠町東高遠

JRバス高遠駅から国道361号線を高遠城跡方面
(東)へ1km(徒歩10分)

遺跡の立地環境：高遠城の北側を流れる藤沢川左
岸の河岸段丘上

調査期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
18.8.7~11.9	1060㎡	廣田和穂

検出遺構

種類	数	時期
建物跡	3	江戸時代後期~明治時代
石垣	2	明治時代以降

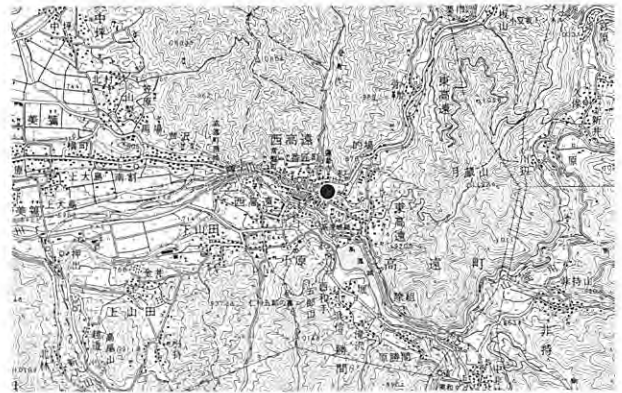
出土遺物

種類	時期・内容
陶磁器	江戸後期(碗、皿、行平、仏飯具、徳利、猪口、香炉、大甕、便器)
金属器	江戸(刀装具、火箸、銭貨)
木製品	近世(下駄)
ガラス製品	近代(オハジキ、瓶)

江戸後期のサムライの屋敷跡を発見

東高遠若宮武家屋敷遺跡は史跡高遠城跡の北西部にある若宮地区に所在する。昨年度は県宝旧馬島家住宅跡を調査し、本年度は近接する屋敷地の調査をおこなった。

建物跡は4棟検出した。いずれも基礎に礎石を用いている。このうち2号建物跡は、江戸後期の絵図「高遠城図」で高遠藩家臣「小松純八」が居住していた区画にあたる。この名は天保8(1837)年の「高遠藩諸士席順」に「御番方」のひとりとして記されており、建物跡の存在時期を検討する資料として注目される。また、礎石の配列は天保年間に作成された「御家中屋鋪絵図」にある「小松純八」宅の間取図とほぼ一致し、二間四方で八畳間を基本とした間取りや、雪隠、掘りゴタツの基礎などが確認された。さらに玄関土間の硬化面を取り除いたところ、行平鍋が蓋をした状態で出土した。把手部分は発見時から残存し



ておらず、はずして埋めたとされる。玄関に容器を埋める例として、3号建物跡では「鉢」が、昨年度調査した1号建物跡(馬島家)では木箱が2点出土している。3軒に共通する性格について、推測の域を出ないものの、近接する美篤地区で出産時の「後産」を大戸口に埋める風習が伝承として残されており、包衣埋納との関連を指摘したい。

このほか2号建物跡の20cm程下では別の礎石列を検出した(4号建物跡)。「小松純八」宅以前の建物跡であるが、礎石列には欠落が多く、建物としての軸方向も複数存在するため、礎石の配置、配列や柱間などの建物構造に関しては把握できなかった。

またトレンチ調査による土層堆積状況の観察結果から、江戸時代以前の自然地形に客土を伴う造成がなされ、4号建物跡が建てられ、さらに客土を伴う造成後「小松純八」宅が建てられたことが判明した。屋敷地の造成や武家屋敷区画の地割形成過程を考える上で良好な資料が得られた。



図33 高遠藩家臣「小松純八」の屋敷跡

たけさ なかはら いとばた
(20) 竹佐中原遺跡 井戸端遺跡

(国道474号飯喬道路関連)

所在地および交通案内

竹佐中原遺跡：飯田市竹佐

中央自動車道飯田ICから国道153号線を阿智方面へ約6km。15分。

井戸端遺跡：飯田市千栄

JR飯田線天竜峡駅から天竜川を渡り、県道1号線を南へ約3km。

竹佐中原遺跡の調査概要

調査期間	調査面積	調査担当者
18.9.4～ 11.14	2,740㎡	若林 卓 鶴田典昭

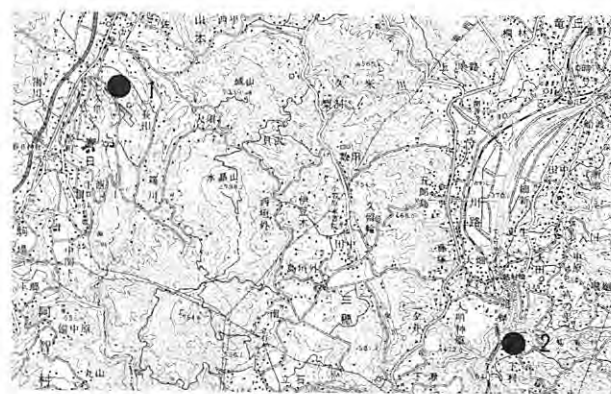
平成12年以來、発掘調査を継続してきたが、最終年度となる本年度は、最後の残件2か所の発掘をおこなった。

遺跡中央の丘陵頂部平坦面に位置する調査区では、旧石器時代の遺物包含層の約25%を掘り下げたものの、遺物は1点も出土しなかった。かく乱内から時期不明の土器片と剥片数点がみつかったのみである。その東方に位置し、丘陵頂部から北側斜面部にかかる調査区では、遺物包含層が欠落しており、かく乱中に打製石斧1点を検出したほかは、遺構や遺物はなかった。

なお、遺跡の重要性を考慮し、中央部調査区の南側約340㎡が現状保存されることとなった(図34左側の未掘部分)。



図34 竹佐中原遺跡 中央部調査区調査状況



1. 竹佐中原遺跡 2. 井戸端遺跡

井戸端遺跡の調査概要

調査期間	調査面積	調査担当者
18.11.13～ 12.11	1,156㎡	若林 卓

井戸端遺跡は天竜川東岸に位置する。天竜川にのぞむ段丘状緩傾斜地に立地し(標高約450m)、飯田市遺跡詳細分布調査報告書では縄文時代中期および中世の遺跡とされているが、発掘調査歴はない。本年度は遺跡状況を把握するための試掘トレンチ調査を実施した。

調査対象地内の地形は、遺跡西側の高地部、中央の谷状部、東側の高地部に大きく分かれている。合計23本のトレンチを設定した。その結果、西側高地部で江戸時代以降の溝跡1条と柱穴17基を検出した。柱穴には掘立柱建物として抽出可能な配置を示すものがある。また、東側高地部では土坑8基を検出した。土坑の時期は不明確だが、周辺から縄文土器、中世内耳鍋、江戸時代以降の陶磁器片が出土しており、該期の遺構が周辺に展開する可能性がある。中央谷状部では現水田造成直前の旧水田とわずかに江戸時代以降の遺物を確認したのみである。本遺跡の、谷をはさんだ東隣には中世の鶯ヶ城跡が位置しているが、今回の試掘調査では、遺跡内に城郭関連施設はなかった。

なお、今回調査をおこなうことはできなかったが、中央谷状部の最奥部には、地元の人びとが古くから利用してきた水場(湧水)があり、その利用状況を追究することが必要である。本調査は、この水場周辺、西側高地部および東側高地部の3か所について実施する必要がある。

II 整理作業の概要

(1) 天神城跡（県道湯川望月線天神バイパス関連）

平成15・17年度に発掘調査をおこない、平成17年度には報告書原稿の執筆、図版作成までを完了させた。本年度は報告書の印刷にかかわる編集、校正、印刷製本および発送をおこなった。

天神城跡の調査課題は、主郭から比較的離れた地点において、①段丘上部に城郭施設が存在するのか、②段丘北西斜面に堅堀が存在するのか、③段丘南東側斜面の段状施設（現在は棚田）が城郭施設の名残であるのかを確認することなどであった。

①では、中世に遡る溝が3条確認された。これらの溝は、現在の地境（小字境）に一致するとともに、天神城の堀切りにも並行していた。このことから、城郭となんらかの関連性をもつ区画溝が配置されていたこと、さらに、その土地区画が現在まで踏襲されてきたことを確認できた。

②では、堅堀を検出できなかった。南東側斜面の発掘所見とあわせると、堀は存在しなかったか、あるいは城郭中心部とは異なり大きく間隔をあけて設置されていた可能性が高い。いずれにせよ、防御性の低い地区であることを示している。

③では、段構築土（盛土）から近世以降の陶磁器が検出された。基盤の改変、盛土、水田面の造成まで、各段に共通する工程が認められ、段ごとに構築年代が異なるとは考えにくい。そのため、少なくとも現状の景観は近世以降に形成されたものであろう。

今回の調査では、主郭からやや離れた地点において、城郭と同時代の土地区画溝を発見できた。このことは、これまで等閑視されてきた中世城郭周辺の土地利用方法の解明や、景観復元研究の端緒を開くことになるであろう。この点で、有意義な資料を提出できたと考えている。

(2) 駒形遺跡（県道諏訪茅野線建設関連）

本年度は発掘調査報告書の刊行を目指して、遺

構・遺物図版の作成、観察表の作成、原稿執筆、編集作業など、本格的な整理作業を実施した。

駒形遺跡は諏訪星ヶ台、和田峠の黒曜石原産地に近く、黒曜石の石器製作や交易にかかった遺跡と評価されており、平成15・16年の発掘調査では合計55,325点の黒曜石製石器が出土した。黒曜石以外の石器類は1,868点にとどまり、石器類全体の97%を黒曜石製が占める。このうち、昨年度までに実施した8,195点の産地同定分析結果について集計が終わり、黒曜石の75%が諏訪星ヶ台産と判明した。駒形遺跡の立地環境からすれば、この結果は妥当と考えられるが、和田峠産の黒曜石は鷹山群など各地点を合計しても20%と低く、さらに、蓼科冷山産が3%認められるといった原産地と集落の関係から、黒曜石交易の実態に迫ることが可能なデータを得ることができた。

石器の組成では、石鏃が1,001点、石鏃未製品と推測されるものが671点を数え、ほかの器種を圧倒する。未製品の観察から、石鏃製作には剥片素材に加工剥離をおこない、製品へと仕上げる工程とともに、原石・石核に対して両極打法による剥離技術と加工剥離を併用して、製品へ仕上げる工程が存在する可能性の高いことが明らかになった。

また、駒形遺跡出土の黒曜石を評価するにあたり、駒形遺跡と同時期の縄文前期前葉集落が検出されている茅野市、下諏訪町、富士見町、大町市、宮田村の教育委員会担当者と、黒曜石情報交



換会を開催した。この会では、黒曜石交易の実態を解明していくために重要な原石の特徴、出土状況、石鏃製作工程、原産地直下および周辺地域の様相、原産地と集落の関係などについて意見交換された。さらに諏訪星ヶ台原産地遺跡出土の黒曜石原石と、駒形遺跡出土の黒曜石原石を直接比較する機会を得るなど有意義なものであった。

駒形遺跡の発掘調査報告書は、本年度3月に刊行される予定である。

(3) 構井・阿弥陀堂遺跡（県道大年線関連）

構井・阿弥陀堂遺跡は、土器の接合・復元、遺物の計測・実測作業および遺物・遺構図版の作成などの本格整理作業をおこなった。報告書の刊行は来年度を予定している。

遺跡の営まれた時期は、縄文時代前期前半から中世におよんでいる。縄文時代前期前半では中越式土器を主体とする集落の一部を調査したが、中越式に伴って東海地方の木島式土器が客体的に散見されている。また、黒曜石は出土資料306点のうち、出土位置が明確な77点の産地同定分析を実施した結果、75%が諏訪の星ヶ台産、20%が和田峠産であることが判明した。

弥生時代後期では4軒の竪穴住居跡と2基の方形周溝墓を確認した。住居域と墓域のあり方から考えると、竪穴住居跡と周溝墓の位置が近接していることから、二時期以上の集落の変遷を考えることができる。また、茅野市内の方形周溝墓の存在は家下遺跡（本跡から南西に約500m）以外では知られていなかったが、本遺跡が2遺跡目の事例となった。

平安時代の遺構の数は、全時代のなかで一番多い。竪穴住居跡22軒、土坑20基であり、周囲の遺跡における過去の調査状況からみても、永明寺山南麓には大規模な集落が営まれていたことがわかる。また、諏訪盆地では甲斐型坏が出土することが知られているが、16号住居跡では、出土した坏のうちのほぼ半数が甲斐型坏であることが判明した。これは、同時期のほかの竪穴住居跡の出土数と比較しても比率が高く、甲斐国との強い繋がりを

を示唆していると考えられる。また、甲州由来の土器のほかに武蔵地方の甕など他地域を起源とする土器が多くみられることは注視される。

(4) 箕輪遺跡（国道153号伊那バイパス関連）

箕輪遺跡は、天竜川右岸の沖積地上に形成され、総面積は80～100haといわれる。このうち、平成17・18年度は、伊那バイパス建設用地の南端にあたる南箕輪村部分について発掘作業をおこなった。

調査では、江戸時代以降の溝跡数本と中世以降の水田跡が検出されている。溝跡のなかで最大のもは、南北さしわたし180mにわたって確認した501号溝（平成13年度の78・81号溝と同一）である。河道状低地の縁辺部付近に沿って流れており、幅約3m、深さは約30cmを測る。地形からみて北から南へ蛇行しながら流れることがわかった。溝の脇には杭列が残存している。護岸施設をもった水路と理解できる。溝の時期を決定する遺物には恵まれなかった。

水田跡は、河道状低地のくぼみに堆積する黒色土層中で確認した。この黒色土を耕作土とした疑似畦畔が認められた。しかし、畔の方向は同一に定まらず、複数時期の水田区画を検出している疑いがある（県埋文センター『箕輪遺跡』2005）。この遺構は、弥生土器も少量含むものの、中・近世の遺物が最も多い点から、中世以降の複数期にわたる耕作の可能性があると判断した。

この水田層の下位に縄文前期土器片1片出土する土層がある。平成13年度の調査では、ここから縄文前期や晩期の土器が出土しているため、弥生中期以前に形成された土層が局部的にのこっている可能性がある。

本年度は、発掘作業に引き続いて整理作業に入った。ここでは、とくに、過年度調査分と南箕輪村教育委員会が実施した発掘状況を踏まえながら、箕輪遺跡南部における遺構の分布や特徴を把握することに努めた。その結果、箕輪遺跡の南限は国道153号から天竜川に向けて東西に走る村道1号線辺りとなることが判明した。

報告書は、本年度末に刊行した。

(5) 石子原遺跡ほか（中央道西宮線飯田南 JCT 関連）

中央道西宮線飯田南ジャンクション（JCT）にかかる遺跡は、北から山本西平、石子原、辻原および赤羽原の都合4遺跡である。発掘調査は当初、国道474号飯喬道路建設事業に伴って国土交通省が所管していた。平成17年度から、既設高速道路の JCT にかかる部分のみネクソ中日本が引き継ぎ、前記4遺跡を飯喬道路本線の各遺跡に先行して報告することになった。

本格的な整理作業は平成17年度におこない、本年度は、本文や図版などの編集、印刷製本および発送にあたった。

石子原遺跡をのぞく3遺跡は、いずれも小規模で、しかも遺構・遺物が希薄であったため、トレンチ発掘を主体とした報告にまとめている。

一方、石子原遺跡は、昭和47年度の調査で確認された旧石器・縄文・弥生・古墳時代の各遺構・遺物に、江戸時代の墓坑群が加わり、遺跡の内容がより重層的になった。

旧石器時代は、前回「前期旧石器時代の石器」と報告されているが、平成12年の旧石器時代遺跡捏造事件をきっかけとして、出土状況や型式の把握に慎重を期した。今回は遺構外出土石器のなかで石器石材、製作技法および出土層位に着目して事実報告をおこなうとともに、特に、ホルンフェルス製石器群について課題をあげた。最終的には、南に隣接する竹佐中原遺跡を中心とした山本地区の旧石器文化を把握する中で再考していく。

縄文時代早期は、8軒の住居跡（遺物集中区を含む）とともに98か所の屋外炉がみつまっている。これらの遺構が集落内でどのように連関するかといった問題については、立野式土器の型式学的位置の比定とともに、やや掘り下げが足りなかった。

古墳時代は、4基の方形周溝墓と円墳の周濠を検出した。そもそも、下伊那地域の方形周溝墓は、石子原遺跡での発見を嚆矢とする。地域史を

一旦総括する意味でもたいせつな報告となろう。

今調査で初見の江戸時代墳墓については、前京大大学霊長類研究所長茂原信生氏、国立科学博物館篠田謙一氏から、人骨形態やその DNA 鑑定について玉稿をいただいた。墓坑や埋葬体位、副葬品などの考古学上の情報とともに報告している。

(6) 川路大明神原遺跡ほか（国道474号飯喬道路 関連）

飯喬道路関連では表記の遺跡を含め、16遺跡の整理作業を実施している。本年度は、土器の接合・復元、石器の器種分類および遺物の実測と拓本をおこなった。

石器の整理過程で、磨製石斧の未製品と考えられる資料が多数確認されている。遺跡に面した天竜川で採取できる石材を用い、磨製石斧の小規模な製作がおこなわれていたらしい。一方で、小型石器石材には、下呂石、黒曜石、珪質凝灰岩など、天竜川では採取できないものが認められる。珪質凝灰岩は、飯田市域の縄文時代遺跡から出土することはまれであり、竹佐中原遺跡 B・C 地点の旧石器時代の石器と同質のものである。

竹佐中原遺跡では、C地点とD地点を中心に、石材別の接合作業、石器とともに採取した自然礫の観察、土壌水洗によって得られた微細遺物の選り分けおよび碎片抽出をおこなった。また、礫群を構成する片麻岩と石英岩の接合作業により、それぞれ厚い板状の礫と亜角礫の母岩に復元された。とくに石英岩は、敲打痕の存在から石器である可能性が指摘されており、ブロック内で打ち割っていることが確認できた意義は大きい。ホルンフェルスは接合作業に着手したばかりであるが、自然面を残す剥片が少ないことを考慮すると、母岩の原形に復元できないと予想される。片麻岩や石英岩とホルンフェルスでは、石材の使われ方や遺跡内でのあり方が異なることになる。

なお、上記の各遺跡は、平成20年度と21年度に報告書を刊行する予定である。

Ⅲ 普及公開活動の概要

(1) 展示会 講演会

- ① 17年度長野県埋蔵文化財センター速報展
～長野県の遺跡発掘2006～

会 場：長野県立歴史館企画展示室

会 期：平成18年3月18日～5月11日



内 容：年度をまたいで速報展開催が定着してきており、ここ5年間で最高の来館者数となった。展示資料は飯田市竹佐中原遺跡出土品を筆頭に、県内10遺跡におよび、旧石器時代から戦国時代にいたる土器や石器、金属器、木器などを厳選のうえで公開した。また、竹佐中原遺跡C地点から石器が出土した様子や、千田遺跡の堅穴住居跡でみつかった大型石囲炉おおがたいしがこいろを実物大で表現してみた。体験広場の設置によって、来館した皆さまに原始・古代の技術に触れていただけたのが好評であった。

来場者：10,651名



- ② 遺跡報告会 講演会

会 場：長野県立歴史館講堂

会 期：平成18年4月8日

内 容：千田・森平・竹佐中原遺跡の報告に続き、京都大学名誉教授で狩猟採集民族研究の第一人者田中二郎氏が「アフリカ大陸の狩猟採集民」と題する講演をした。

聴講者：116名

- ③ 17年度長野県埋蔵文化財センター速報展
～長野県の遺跡発掘2006～

会 場：伊那文化会館展示室

会 期：平成18年7月6日～7月23日

内 容：ここ数年、継続して実施している南信地区の巡回展示である。広いフロアでは、千田遺跡の堅穴住居跡の広さを体感していただけるように工夫してみた。期間中予定していた遺跡報告会とミニシンポジウム「天竜川の考古学」が、豪雨災害によって中止となった。

来場者：918名

- ④ 県庁ロビー展～長野県の遺跡発掘2007～

会 場：長野県庁1階ロビー

会 期：平成19年2月7日～2月16日

内 容：県文化財・生涯学習課主催事業に協力し、県庁を訪れる人を対象に埋蔵文化財や長野県の歴史、当センターの業務を理解してもらうことを目的とし、本年度調査された遺跡の資料を展示した。



- ⑤ 屋代駅市民ギャラリーパネル展
 ～写真でみる長野県の遺跡発掘2007～
 会場：しなの鉄道屋代駅
 千曲市民ギャラリー
 会期：平成19年2月27日～3月7日
 内容：県立歴史館で開催される速報展のプレイベント。最寄りの屋代駅構内で写真パネルを中心とした展示をおこなった。
- ⑥ 18年度長野県埋蔵文化財センター速報展
 ～長野県の遺跡発掘2007～



会場：長野県立歴史館企画展示室
 会期：平成19年3月17日～
 内容：平成18年度に発掘調査と整理をおこなった遺跡の出土資料や関連遺跡の資料を展示している。焦点となる展示のひとつには、西近津遺跡群で発見された国内最大級の大型住居の復元、佐久地域の弥生時代の出土品がある。

たこともあり、多くの見学者であふれた。遺物のミニ展示も好評である。来年度も継続するこれらの遺跡では、遺跡の個性を引き出しながら、リピーターにも配慮した説明会を計画していきたい。

(2) 現地説明会

本年度も、調査の進捗状況にあわせて、計9回の現地説明会を実施した。

御社宮司遺跡や東條遺跡では、雨にたたられながらも見学する、非常に熱心な市民の皆さまが来跡した。こうした方がたのためにも、南曾峯遺跡や今井宮ノ前遺跡で試みたように、発掘作業そのものを見ていただく機会がもっとあっていいかもしれない。表町遺跡では製作した打製石斧を用いて落とし穴を掘ってみせた。発掘現場ならでは、体験型の説明会も工夫次第である。西近津・周防畑遺跡は、多くの住居跡がみつかっ

(3) ニュース～みすずかる～

年3回発行の「みすずかる」は通巻で12号を数える。本年度は第1号「信州の水田跡あれこれ」、第2号「中・近世の遺跡」、第3号「整理作業について」を特集した。

第1号では、千田遺跡（中野市）の中世水田跡を巻頭に据えて、近世の西一里塚遺跡（佐久市）と御社宮司遺跡（茅野市）の水田跡を並べて、時期や地域によって異なる水田形態を比較してみた。

第2号は近世高遠藩の若宮武家屋敷跡でみつかった礎石建物が天保年間に描かれた絵図そのままだった様子を巻頭で示している。また、戦国時代の表町遺跡（飯綱町）や鎌倉時代後半の東條遺跡（千曲市）の屋敷割りや礎石建物もあわせて紹介した。

期日	遺跡名	参加者
5月20日	森平遺跡	108名
6月4日	南曾峯遺跡	30名
6月14日	今井宮ノ前遺跡	20名
7月16日	御社宮司遺跡	71名
7月29日	東條遺跡	77名
8月27日	表町遺跡	60名
9月2日	西一里塚遺跡	112名
9月3日	東高遠武家屋敷跡	84名
9月16日	西近津・周防畑遺跡	193名



Ⅳ 研修、資料調査等の概要

(1) 講師招へいなどによる指導

期 日	指導者名	指 導 内 容
4月8日	京都大学名誉教授 田中二郎	アフリカの狩猟採集民の生活と旧石器、縄文時代人との比較
5月31日	竹佐中原遺跡等調査指導委員長 戸沢充則	竹佐中原遺跡の報告書作成に向けての整理方針について
〃	県遺跡調査指導委員 工業普通	六角木幢保存修復にかかる報告書作成に向けての整理方針について
6月2日 11月10日	労働衛生コンサルタント 和田安雄	労働関係法令、労務管理について
6月9日	奈良教育大学教授 長友恒人	南曾峯遺跡のルミネッセンス年代測定
6月12日	竹佐中原遺跡等調査指導委員長 戸沢充則 県立歴史館専門主事 大竹憲昭	南曾峯遺跡の石器及び調査方法について
6月15日	信州大学教授 赤羽貞幸	南曾峯遺跡の地質及び石器の石材について
7月27・28日	京都大学名誉教授 茂原信生	東條、森平、周防畑遺跡出土の獣骨の鑑定、調査法について
8月4日	恵信病院院長 茂木哲夫	熱中症予防等夏の健康管理について
9月22日	信州大学教授 笹本正治	表町遺跡の遺構及び矢筒城について
11月7日	信州大学教授 原山 智 竹佐中原遺跡等調査指導委員 松島信幸	竹佐中原遺跡の地形、地質について
12月4日	信州大学教授 原山 智	駒形・川路大明神原遺跡の石器石材について
12月11日	東北芸術工科大学教授 宮本長二郎	西近津遺跡大型住居跡について
12月13・14日	新潟県埋蔵文化財調査事業団 三ツ井朋子	土器復元の技術について
2月27日	県文化財保護審議会委員 吉澤正己	東高遠若宮武家屋敷の建物について
3月1日	竹佐中原遺跡等調査指導委員長 戸沢充則 同委員 松島信幸 奈良教育大学教授 長友恒人 信州大学教授 原山 智 ナウマゾウ博物館 中村由克	竹佐中原遺跡の地形・地質、石器石材、年代測定について
3月8・9日	首都大学東京准教授 山田昌久	東條・西一里塚・表町遺跡の木製品について

(2) 全埋協などへの参加

期 日	会 議 名	開催地	参加者
4月21日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会 中部・北陸ブロック連絡会	笛吹市	綿田弘実 山崎勇治
6月8日・9日	第27回全国埋蔵文化財法人連絡 協議会総会	山口市	根岸誠司 平林 彰
9月21日・22日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会 研修会	札幌市	上田典男 山崎勇治
10月26日・27日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会 中部・北陸ブロック連絡会	湯沢町	市澤英利 山崎勇治
11月1日・2日	平成18年度関東甲信越静地区 埋蔵文化財行政担当者会議	甲府市	藤原直人
11月21日・22日	平成18年度関東甲信越静地区 埋蔵文化財行政担当者研修会	飯田市	上田典男 平林 彰 中野亮一 鶴田典昭
11月30日 12月1日	平成18年度第2回全国埋蔵文化財法人連絡協議会 役員会	大阪市 和泉市	平林 彰

(3) 県外研修（奈良文化財研究所、埋蔵文化財担当者専門研修）

期 日	参加者	研修内容
5月15日～19日	入沢昌基	「掘立柱建物、礎石建物遺構調査課程」受講
10月24日～27日	白沢勝彦	「遺跡地図情報課程」受講
11月14日～17日	山崎まゆみ	「自然科学的年代決定法課程」受講
11月27日～12月1日	廣田和穂	「古代集落遺跡調査課程」受講
12月12日～19日	河西克造	「中・近世城郭調査課程」受講
1月10日～19日	柳澤 亮	「報告書作成課程」受講
2月1日～9日	小林秀行	「古代陶磁器調査課程」受講
2月23日～28日	岡村秀雄	「環境考古学（生物編）課程」受講

(4) 考古学関係研究・研修・講演会での発表

期 日	内 容	発表者
5月28日	日本考古学協会研究発表会「2005年度竹佐中原遺跡の発掘調査の成果と課題」	鶴田典昭 市澤英利 平林 彰 若林 卓
〃	日本考古学協会研究発表会「長野県千曲市社宮司遺跡出土の六角木幢とその背景」	市澤英利 平林 彰 (町田勝則)
6月18日	長野県考古学会遺跡報告会「佐久市西一里塚遺跡の発掘調査」	櫻井秀雄
10月14・15日	津南町教委開催シンポジウム「火焰土器の時代」にて「千曲川水系の集落構造と住居形態」及び「千曲川水系の中期土器の様相」	綿田弘実 寺内隆夫
10月21・22日	長野県旧石器文化研究交流会「竹佐中原遺跡の調査と石器群」及び「長野市南曾峯遺跡の発掘調査概要」	鶴田典昭
12月2・3日	長野県考古学会秋季大会「縄文時代中・後期の大規模集落遺跡における時間－茅野市聖石遺跡・長峯遺跡の調査から」「古代の集落遺跡における遺物廃棄について－集落内の遺構間接合から考える－」	柳澤 亮 廣田和穂

(5) 県内市町村及び関係機関への協力・指導

期 日	市町村等	協力・指導内容	協力者
4月23日	岡谷市	土師の会 考古学学習会講座	鶴田典昭
5月15日 9月8日 1月16日	阿智村	園原発掘調査懇談会	市澤英利
5月21日	飯綱町	企画展「飯綱町の縄文土器」展示解説会	寺内隆夫
5月24日 2月8日	中野市	中野市歴史民俗資料館専門委員会	入沢昌基
7月23日	佐久市	史跡龍岡城跡石垣修理の指導	河西克造
8月2日	飯綱町	博物館実習生の発掘調査体験受け入れ	中野亮一 山崎まゆみ
9月1日	東御市	東御市図書館埋蔵文化財講座の遺跡視察研修	桜井秀雄 上田 真 西 香子 寺内隆夫
9月30日	塩尻市	平出博物館土曜サロン	寺内隆夫
9月30日	茅野市	国史跡駒形遺跡報告会での調査報告	賛田 明
10月4日	飯綱町	町議会議員表町遺跡見学	中野亮一 山崎まゆみ
10月14・15日	新潟県津南町	シンポジウム「火焰土器の時代」	綿田弘実 寺内隆夫
10月21・22日	信濃町	フォーラム「日本列島にはじめて渡ってきた人びとを探る」	鶴田典昭
10月29日	飯綱町	見学会「戦国時代の飯綱町と表町遺跡」の説明	中野亮一
10月29日	茅野市	平成18年度信州黒曜石サミットでの関連展示	賛田 明
11月1日	飯綱町	飯綱町文化財調査委員の表町遺跡見学	中野亮一 山崎まゆみ
11月24日	伊那市	史跡高遠城跡本丸発掘調査指導	河西克造
11月26日	金沢大学学生	西近津遺跡見学	櫻井秀雄
12月9・10日	新潟県津南町	幅上遺跡、野首遺跡出土土器の指導	寺内隆夫
12月13日	佐久市	市議会議員西近津遺跡群見学案内	柳澤 亮 寺内隆夫
1月5日	松本市	県史跡小笠原城跡（桐原城）の調査方法指導	河西克造
1月22・23日	阿智村	園原ビジターセンター建設委員会	市澤英利
2月2日	坂城町	込山D遺跡ほか出土縄文土器様相について	綿田弘実
2月6日	佐久市シルバ ーセンター	シルバーセンター地域懇談会での講師	寺内隆夫
2月9日	県教育委員会	黒曜石原産地遺跡保有市町村連絡会議	上田典男
2月11日	諏訪考古学会	諏訪地区遺跡調査研究発表会	河西克造
2月25日	平出博物館	松本・木曾地区遺跡発表会	柳澤 亮

(6) 学校への協力・指導

期 日	学校名	協力・指導内容	協力者
4月20日	通明小学校	6年生社会科歴史学習への出前授業	寺内隆夫
5月17日	木祖小学校	体験広場で使った縄文原体の貸し出し	廣田和穂
5月19日	豊野中学校	1年生5名総合的な学習の時間での南曾峯遺跡見学	鶴田典昭
5月26日	八幡小学校	6年生24名東條遺跡見学	小林秀行 岡村秀雄
6月5日	永田小学校	6年生14名千田遺跡見学	綿田弘実 市川隆之 入沢昌基
7月19日	宮川小学校	6年生113名御社宮司遺跡見学（雨天中止）	河西克造 藤原直人
7月24日	山ノ内東小学 校	6年生73名千田遺跡見学（冠水のため中止）	綿田弘実 市川隆之 入沢昌基

期 日	学校名	協力・指導内容	協力者
8月1日～ 3日	篠ノ井高校	2年生1名就業体験学習	岡村秀雄 小林秀行
8月28・29日	軽井沢高校	3年生1名発掘現場体験	桜井秀雄 寺内隆夫
9月22日	高島小学校	6年生30名の「ふるさと体験講座」の講師	河西克造
9月26日	中野高校	2年生30名千田遺跡見学	綿田弘実 市川隆之 入沢昌基
9月29日 10月3・5日	北部高校	1年生60名表町遺跡見学	中野亮一 山崎まゆみ
10月28日	佐久社会科同 好会	西近津遺跡での発掘体験	寺内隆夫 寺澤政俊 白沢勝彦 柳澤 亮
11月10日	上田第六中学 校	「ふるさとタイム」での講師	上田典男
11月21日	上田西高校	教員6名西近津遺跡発掘現場見学	寺内隆夫 寺澤政俊 白沢勝彦 柳澤 亮 河西克造

(7) 資料提供・貸出し、転載許可

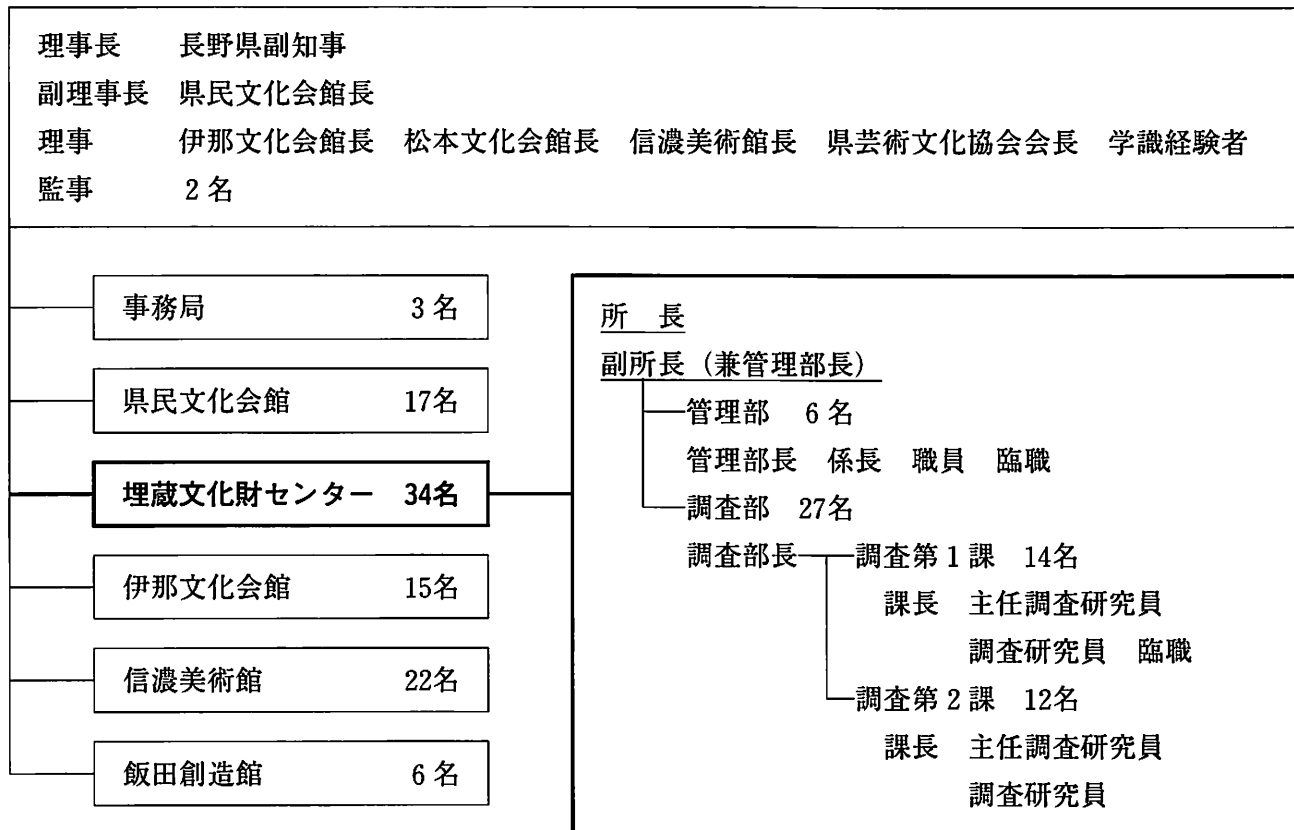
- ・株式会社雄山閣：茅野市長峯遺跡出土阿玉台式土器写真・図版10点
- ・長野県立歴史館：飯田市石子原遺跡出土遺物及び写真パネル12点
- ・株式会社コパニカス：中野市千田遺跡全景写真ほか2点
- ・株式会社河出書房新社：飯田市竹佐中原遺跡出土石器写真1点
- ・赤旗：飯田市竹佐中原遺跡C地点石器出土状況写真1点
- ・株式会社みすず総合コンサルタント：飯綱町表町遺跡での計測システム実証実験結果
- ・長野県立歴史館：上田市国分寺周辺遺跡群カマトほか写真パネル21点
- ・松岡中一郎氏：長野市松原遺跡写真パネル5点
- ・株式会社新人物往来社：千曲市東條遺跡出土漆器写真1点
- ・野尻湖ナウマンゾウ博物館：飯田市竹佐中原遺跡A・C・D地点出土石器、同遺跡出土石器写真1点、長野市南曾峯遺跡出土石器
- ・篠ノ井商工会議所：長野市篠ノ井遺跡群出土土器、石川条里遺跡用水路跡の写真各1点、長野盆地南部の地形図1点
- ・毎日新聞社出版局：社宮司遺跡出土六角木幢ほか写真7点
- ・佐久市教育委員会：唐松B遺跡・離山遺跡・川田条里遺跡報告書掲載写真・図14点、屋代遺跡群景観、屋代木簡15号、同4号写真3点
- ・株式会社雄山閣：大室古墳群第23号墳全景、屋代遺跡群周辺の遺跡図2点
- ・日本考古学協会：飯田市竹佐中原遺跡石器出土状態写真、千曲市社宮司遺跡六角木幢復元写真2点
- ・東京法令出版株式会社：箱清水式土器集合写真、石川条里遺跡出土木製農具写真
- ・上田市立信濃国分寺資料館：東條遺跡出土木製蘇民将来符及びその写真
- ・(株)新人物往来社：西近津遺跡発見大型竪穴住居跡の写真
- ・長野県教育委員会：中野市千田遺跡縄文時代集落写真
- ・長野県立歴史館：千曲市社宮司遺跡出土漆紙文書全体写真
- ・佐久考古学会：西近津遺跡発見大型住居跡の写真
- ・国立科学博物館：竹佐中原遺跡俯瞰写真ほか2点

V 組織と事業の概要

(1) 組織

財団法人長野県文化振興事業団

【役員】 9名



(2) 職員 (臨時職員を除く)

	所長	仁科松男
	副所長	根岸誠司
管理部	管理部長	根岸誠司 (兼務)
	係長	山崎勇治
	職員	藤森富士子 依田文子 藤原 亨 (18.9.30退職) 窪田秀樹 (19.2.1着任)
調査部	調査部長	市澤英利
	第1課	上田典男 (課長) 廣瀬昭弘 (主任) 寺内隆夫 (主任) 寺澤政俊 白沢勝彦 上田 真 西 香子 櫻井秀雄 廣田和穂 賛田 明 柳澤 亮 市川桂子 土屋哲樹 (18.9.30退職) 寺内貴美子 (19.1.24復職)
	第2課	平林 彰 (課長) 綿田弘実 (主任) 岡村秀雄 (主任) 小林秀行 藤原直人 市川隆之 河西克造 若林 卓 中野亮一 鶴田典昭 入沢昌基 山崎まゆみ

(3) 事業

経費はH19.3.10現在

事業名		委託事業者	事業個所	事業内容	経費(千円)
受託事業	調査	替佐・柳沢築堤	国土交通省 千曲川河川事務所	中野市 千田遺跡ほか	発掘作業 112,044
		北陸新幹線	北陸新幹線建設局	長野市 南曾峯遺跡ほか	発掘作業 11,929
		中部横断自動車道	国土交通省 関東地方整備局	佐久市 西近津遺跡群ほか	発掘作業 291,188
		一般国道18号 (坂城更埴バイパス)	国土交通省 関東地方整備局	千曲市 東條遺跡ほか	発掘作業 72,243
		一般国道20号 (坂室バイパス)	国土交通省 関東地方整備局	茅野市 御社宮司遺跡	発掘作業 36,311
		中央道西宮線 飯田南JCT	中日本高速道路株式会社 飯田保全サービスセンター	飯田市 石子原遺跡ほか	整理作業 4,267
		一般国道474号飯喬道路	国土交通省 中部地方整備局	飯田市 竹佐中原遺跡ほか	発掘作業 整理作業 46,573
		(主) 長野荒瀬原線	長野建設事務所	飯網町 表町遺跡	発掘作業 40,115
		(主) 長野上田線	千曲建設事務所	千曲市 力石条里遺跡群ほか	発掘作業 43,761
		(一) 湯沢望月線	佐久建設事務所	佐久市 天神城跡	整理作業 567
		(都) 3.4.2号大年線	諏訪建設事務所	茅野市 構井・阿弥陀堂遺跡	発掘作業 整理作業 12,452
		県道諏訪茅野線	諏訪建設事務所	茅野市 駒形遺跡	整理作業 19,424
		一般国道153号 (伊那バイパス)	伊那建設事務所	南箕輪村 箕輪遺跡	発掘作業 整理作業 7,439
		一般国道152号 (高遠バイパス)	伊那建設事務所	伊那市東高遠 若宮武家屋敷	発掘作業 7,927
		若宮武家屋敷遺跡 埋文発掘調査	伊那市	伊那市東高遠 若宮武家屋敷	発掘作業 9,146
	研修	専門的知識技術の習得	県教育委員会	奈良文化財研究所	研修 282
自主事業	速報展など	7月：県伊那文化会館 2月：屋代市民ギャラリー 3月：県立歴史館			

長野県埋蔵文化財センター年報23 2006

発行日 平成19年3月16日

編集発行 (財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田963-4

電話：026-293-5926 FAX：026-296-8157

E-mail：maibun@grn.janis.or.jp

印刷 信毎書籍印刷株式会社